

信西一門の真俗ネットワークと院政期絵画制作

マイケル・ジャメンツ

訳者 米倉迪夫

序

藤原通憲(一一〇六―一五九)の子孫たちは院政期後期を通して、真俗(すなわち僧侶と俗人)の境界を越え広範な知識人のネットワークを形成していた。しかしその個々人が当代の絵巻や仏教図像の研究において随所でふれられることはあっても、一門総体として院政期絵画との関連の中で論じられたことはなかった。⁽¹⁾

藤原通憲(信西あるいは少納言入道)はおそらく文化人としてよりも失脚した政治家として記憶されることが多いだろう。無残な死をむかえることになった信西の持つ、一見策略にたけた黒幕という拭いがたいイメージは「保元物語」や「平治物語」や、特に十三世紀の『平治物語絵巻』における信西の首をかかげて都をパレードするつわもの達のシーンに由来するのである。⁽²⁾『藤原通憲資料集』⁽³⁾が出て、信西とその子息達の文化的活動に光があてられたにもかかわらず、いまだ院政期の政治的闘争の文脈で信西をとらえている人が多いのが現状である。

この一門が美術史の文脈で語られるのは、慶派仏師との関連にお

いてであった。⁽⁴⁾あるいは一門の体系的研究はといえば、複雑な人間関係の網目を通して『平家物語』の生成と一門の曰く言い難い関係に目をむけがちであった。⁽⁵⁾こうした人間のつながりを頼りにした、あいまいで危うい議論は、これに取り組んできた文学史家に責任があるわけではなく、この問題が複雑そのもので、あつかう資料も意味が不明確だからである。

ところで、真俗の流れを形成している信西一門の中で、院政期に盛行し始めたある種の仏画と明かに関わりを持つ一流がある。これは安居院流の僧達(初めての世襲的唱導僧の一派といわれる)で、彼らと普賢菩薩十羅刹女の図像を関連づけることができるのである。院政期から鎌倉時代末に至るまで、安居院流の僧侶が導師をつとめる一連の皇族の追善供養を見ると、ここに普賢菩薩の単体像あるいは十羅刹女をともなう像が奉懸されているのである。⁽⁶⁾

図1は典型的な普賢菩薩十羅刹女図から派生した図様を示している。これは鎌倉時代後期の作品(院政期に遡る作例はほとんど現存しない。また制作年代の明かな作品も存在しない)⁽⁷⁾である。

安居院流の僧侶と普賢・十羅刹女の関連は追善供養の記録、供養を彩る表白から知ることができる。最適な例は安居院の祖で、信西



図1 普賢菩薩十羅刹女図
奈良国立博物館

息澄憲(一一二六―一二〇三)の表白であろう。『十二卷本表白集』の中の一例からは上西門院が母待賢門院(一一〇一―四五)⁽⁸⁾のためにとりおこなった追善供養の様がありありとみてとれる。この供養で女院女房達は意外な手段をとっている。一世代前に待賢門院自身が残した和歌の題に心をうたれて、それぞれが法華経の一品を書写しているのである。

表白全体はあまりに長文でここにはすべてを紹介できないが、江戸初期の写本を忠実に伝えるとみえる江戸末期の転写本である『翰林拾葉』から一部を引いておく。⁽⁹⁾

○上西門院奉為待賢門院一品経供養表白

澄憲法印作于時僧都

夫已今当諸経之裏

以法花而為最尊ト

空假中三諦之門

以実相ヲ而為究境ト

(中略)

然間 母儀前待賢門院

昔有レ書写ニスルコト法花廿八品ノ首題ヲ

伝得テ掌ノ中ニ 懐旧之腸タ忽ニ摧ク
披見シテ眼前ニ 恋暮之涙難抑⁽¹⁰⁾

仍得テ彼旧キ題名ヲ
方写此新キ経卷ヲ

唯聖靈ノ之御筆ニ詛女人一二以書レシム之始自後宮

仙院至于親疎貴賤^{アツラハ}撰テ婦人之堪タルヲ執筆ニ

分品々令レ書写之兼又奉始

(中略)

又詛女人二図シ十願王十羅刹ノ之聖容ヲ

備ハ香花ヲ展ニ以ス賛嘆開講ノ之梵筵ヲ

实ニ是鄭重之報恩也

抑又希代ノ勝事歟

観夫六書八^{ミレハ}体者婦女人ノ所不堪也 今勸テ三十三人ヲ而

分ニツ卷軸ヲ

黄金白玉者俗人ノ所貴重スル也 今飭ニ二十八品ヲ

而耀ニ眼界ヲ

ここには当追善供養の重要な部分が表示されているのだが、明瞭さに欠ける。もし澄憲が当供養の導師をつとめ、そのために述作した表白であったにしても、いったい何時、どこでこれが説かれたのかここからははっきりと知ることができない。しかし、表白の内容や同時代の供養のありかたから考えると、この法会は一七〇年代、法金剛院内のいずれかの御堂で澄憲によってとりおこなわれた可能性が高い。この法会については表白からいくつかの事実が確認できる。まず1)この法会は法華経一品経供養である。2)上西門院(後白河院の実妹)の発願であること。3)法会は上西門院母、待賢門院

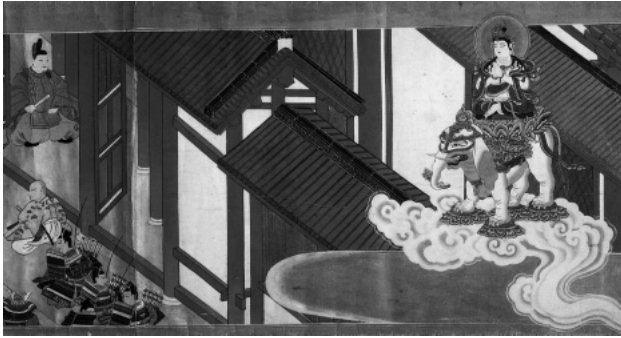


図2 東大寺大仏縁起 東大寺
普賢菩薩、東大寺大仏殿供養に来迎

の追善供養である。4) 待賢門院自身の書き置いた法華経二十八品の短い経文からなる漢文首題がこの新たな法華経書写事業をうみだした(5)。5) 上西門院の女房達が書写を行っている(6)。女房たちが普賢菩薩、十羅刹女の図を描いていること(10)。

この表白は安居院と宮廷との関係を物語るものと考えられる。この絵画で具体的に見て取れる安居院と宮廷の関係は、澄憲時代、院政時代を通じてさらに鎌倉時代末にいたるまでたどることができ、さらに宮廷との関係は、追善供養ばかりか安居院の僧侶が代々法光仏供養に勤仕し、宮廷における安産祈願を行っていることからも理解できよう(11)。

第二章 院政後期における一門の立場

上述の安居院流の僧たちは、信西一門のひとつの流れにすぎない。拙論の主たる関心は他の門流にある。ここからは特に東大寺、興福寺、醍醐寺において主要な役割を担った一門の人々に焦点をあててみたい。

建久六年(一一九五)の東大寺落慶供養は信西の息である東大寺別当勝賢(一一三八—一一九六)、興福寺別当覚憲(一一三三—一一二二)がしめる重要な役

割を象徴する画期的な出来事であった。豊かな色彩でこの儀式を描く『東大寺大仏縁起絵巻』は、室町時代における東大寺再建勸進のためにいくつもの写本が作成されたと考えられているが、数世紀が経過しているにもかかわらずこの落慶供養の盛儀が再現されている(12)。

この絵巻が語るひとつのエピソードには一一八〇年東大寺焼亡以後の勸進事業のクライマックス、そして落慶供養に勤仕する千人の僧侶をしたがえる勝賢と覚憲というふたりの役割に光があてられている。絵巻にはこの二人は描かれていないが、頼朝が普賢菩薩とともに表されている。普賢菩薩は白象に乗り、あたかも天平創建時における菩提遷那の化現、影向を思わせるドラマチックな来迎である。

『東大寺大仏縁起』第七段 詞書

建久六年三月十二日、大仏殿の供養。後鳥羽院、行幸あり。供養の導師、興福寺別当・権僧正覚憲、呪願師、当寺の別当。権僧正勝賢、其の外の衆僧、人数、天平の供養に異ならず。勅定に依りて、頼朝、相模国より十万騎を卒し、南都に上洛あり。大仏殿を三重に守護せり。即ち、頼朝は、大仏殿の北、中門に着し、自ら中門の柱に判形を据へ、後代の亀鏡と備へ侍り。

其の日の奇特、一にあらず。普賢菩薩、白象に乗じて、供養の砌へ出現し給へり。

昔、天平の供養には、菩提僧正と現じ、今、目の辺り影向し給ふ事、古今の化儀同じき事、頼もしきかな。

再建の落慶供養は頼朝による新たな支配体制にとつての晴れの舞台でもあった。数千の武装兵士を従え境内に、さらには九条兼実、若き後鳥羽天皇側近、俊乗房重源らもこれに従った(13)。しかし何より

表1 『東大寺大仏縁起』による東大寺再建落慶供養参列の僧網の僧

左方	呪願前権僧正「勝賢」 引頭良尋権少僧都 唄延杲法印 権大僧都 雅縁法印権大僧都 印性権大僧都 信宗権大僧都 勝詮権少僧都			
散花	宗元権少僧都	貞覚権少僧都	実継法眼	
	公円法眼	清延権律師		
衲衆	定勝法眼	経円権律師	俊遍権律師	信憲権律師
	顕忠権律師	玄季権律師	成実権律師	範賢律師
	尋教法橋	清長法橋	藏有法橋	定円法橋
	忠慶法橋	理真 章縁	寛幸 教観	順高 範円 仁快、以上三会已講
右方	導師権僧正「覚憲」 引頭承円権少僧都 唄慶智法印権大僧都 覚弁権大僧都 弁曉権大僧都 公胤権大僧都 行知権少僧都			
散花	行舜権少僧都	宗遍法眼	慶澄法眼	
	覚教法眼	澄英権律師		
衲衆	増覚権律師	公雅権律師	宗嚴権律師	能遍権律師
	同長権律師	貞敏権律師	成賢権律師	珍賀法橋大威師
	雅同法橋	季嚴法橋	乗信法橋	範晴法橋
	尋恵法橋	善宗大法師	弁忠大法師	晴弁大法師
	増寛大法師	寛任大法師	有覚 観俊	顕同 定範 信弘 聖覚、以上三会已講
その他、通憲の孫たち	恵敏 貞玄 縁成 範信			

も信西一門にとつての華々しい日であった。三世紀以上も後の縁起
 絵巻詞書にはこの一大盛儀における兄弟ふたりのみの役割が記され
 ているが、実は信西の子孫達は武士や貴族、皇族の集う中であつて

疑いなく重要な位置をしめている。
 『東大寺統要録』の記録によれば、この落慶供養を担った僧網位
 クラスの僧侶は約六十名である。そのうち十一名、約二割にあたる
 僧侶が信西の子息や孫(□)で示
 す⁽¹⁴⁾である。他の五名は勝賢の弟
 子か、彼に関わる者にあたる(□
 で示す⁽¹⁵⁾)。さらに信西の子孫たち
 は少くとももう四名が声明衆に混
 じっていた⁽¹⁶⁾。

この開眼供養で枢要な地位を占
 めた他の僧侶の家柄を調べてみる
 と、信西一門の存在感が際立って
 いる。信西一門に次ぐのが藤原氏
 の大炊御門家で四名、藤原氏の勸
 修寺流や撰閑家からはそれほど選
 ばれていない。
 表2に見られるように信西一門
 は主に真俗合わせて四つに分ける
 ことができる。真言僧(主に醍醐
 寺)、南都仏教僧(主に興福寺、東
 大寺の法相、三論)、天台僧(主に安
 居院流)、そして俗人のグループ
 である(俗人とはいえ、本論文で扱
 う人々のほとんどは最終的には出家
 入道している)。

表2 院政期に活動した信西一門（*は東大寺供養に参加した僧侶）

	子息	孫	曾孫
真言宗	寛敏? - 1182 (広隆寺別当) 明遍 1143 - 1224 (権大僧都) 顕耀 1135 - 89 (嘉祥寺別当、功德院) 勝賢 * 1136 - 96 (醍醐寺座主) (東大寺別当等)	成賢 * 1162 - 1231 (醍醐寺座主) 定範 * 1165 - 1225 (醍醐寺座主、東大寺別当等) 範賢 * 1164 > 1205 (石山寺座主等) 海恵 1172 - 1207 (功德院、清涼寺別当) 範耀 1165 > 1217 (嘉祥寺別当) 全賢 (1184 - 1233) (醍醐寺、無量寿院)	憲深 1263 (醍醐寺座主) 浄真 1191 - 1240 (醍醐寺、無量寿院)
法相・三論宗	覚憲 * 1133 - 1212 (興福寺別当等)	貞玄 * 1171 > 1210 (東大寺・勸修寺) 信憲 * 1145 - 1225 (興福寺別当) 貞敏 * < 1176 > 1204 (東大寺、少僧都) 貞慶 1155 - 1213 (解脱房上人) 縁成 * 1166 > 1206 (法印権大僧都) 範信 * 1176 - 1226 (法隆寺別当、清水寺別当) 恵敏 * ? - > 1203 (東大寺、得業)	円憲 1197 - 1251 (清水寺別当) 尊憲 1226 - > 98 (興福寺別当) 長恵 > 1196 > 1248 (東大寺、法印権大僧都) 明玄 1178 > 1215 (東大寺、律師)
天台宗	澄憲 1126 - 1203 (安居院、法印大僧都) 静賢 1124 > 1204, (蓮華王院、等)	聖覚 * 1167 - 1235 (安居院、法印権大僧都) 貞雲 1198 - 1249 (安居院、法印) 貞覚 * ? > 1198 (権大僧都)	隆承? - 1246 (安居院、法印大僧都) 聖憲 1217 > 68 (安居院、法印) 信承 1198 - 1266 (安居院、法印権大僧都)
俗人	俊憲 (真寂) 1122 - 67 貞憲 (弁入道生西) 1123 - 80? 成範 (所謂桜町中納言) 1135 - 87 修範 (円浄、大原宰相入道) 1143 < 96	基明 < 1159 > 71 (安芸守) 基範 (刑部郷、従三位) 1159 > 1200 範能 (大宰大二) > 1167 > 1213	範宗 (従三位) 1171 - 1233 有能, < 1188 - 1252 (左京大夫)

まず、最も注目に値するのが真言僧グループで、ここには三世代にわたる四人の醍醐寺座主が含まれている。信西息の覚洞院勝賢は三度醍醐寺座主に任ぜられている。次いで遍智院成賢・東南院定範兄弟、共に信西の孫である。さらに成賢弟子の報恩院憲深である。⁽¹⁷⁾最初の三名は*で示しているように東大寺落慶供養に参列している。次に南都のグループである。ここでも興福寺別当を三代にわたって占めている。信西息の宝積院覚憲、信西の孫で覚憲の弟子である修禅院信憲⁽¹⁸⁾、それに尊憲⁽¹⁹⁾。前二者は東大寺落慶供養に参列している。天台僧はまず信西息の静賢・澄憲兄弟。次いで澄憲息である聖覚(東大寺供養参列)。ちなみに安居院流は鎌倉時代末まで七世代にわたって世襲されている。⁽²⁰⁾

絵画制作との関連で、もっとも注目に値する俗人といえは信西の嫡子、俊憲(法名真寂)と俊憲と母を同じくする次男貞憲(法名生西醍醐寺無量寿院における活動については後述)であろう。母を異にする成範(桜町中納言)と修範(法名円照)にも注目しておきたい。

表に記した人物についてはそれぞれに語るべきことがあり、また『尊卑分脈』を見ると院政後期に生存が確認できる何人もの子孫たちもいるが、その全てについてここでふれることはできない。ただ、表を参照して注目すべきことは、上記以外の人々のうちには、一門のひとりの足跡を追うように、清水寺別当と醍醐寺無量寿院主になっている別のひとりがいることである。同様にこの一門の明らかな傾向として院政期最終段階(一一九〇―一二三二)で大和とその近隣の地に集まっていることも指摘できよう。

信西一門の影響力は、何世代にもわたって彼らの存在感を示した寺院のみに限られない。信西のもう一人の子息寛敏は広隆寺別当と

なり、孫の範信は法隆寺別当になっている。さらにこの時期、いくつもの職を歴任し活躍した二人の子孫がいる。そのひとりには後白河院の相談役として知られる静賢法印で、彼は法勝寺、最勝光院、蓮華王院などの皇室に直接関わる寺院の管理を任されていた様子で、その蓮華王院の宝蔵には後白河院の絵巻や貴重な宝物のコレクションが蔵されていたと考えられている⁽²¹⁾。

信西の孫範賢もまた同じようにいくつもの職についた事例として興味深い人物である。範賢は桜町中納言として知られる成範の息であり、兄弟には成賢、定範（二人とも醍醐寺座主）がいる。範賢は石山寺別当として知られるが、その在任期間のことはあまり知られておらず、禅林寺・観心寺・神護寺の任にあった事実も正しく理解されていない。図4は『東寺百合文書』中の『三箇寺 石山 禅林 観心 座主次第』（未公刊）の一部で、彼の職や在任期が記されている。それによれば範賢のこれら寺院における在任期間は治承三年（一一七九）から建久八年（一一九七）まで二十年近くにわたっている⁽²²⁾。これら寺院における範賢の役割はつきりしないし、現存する同時代史料から座主の任務や範賢がはたした役目を知る手だてではない。しか

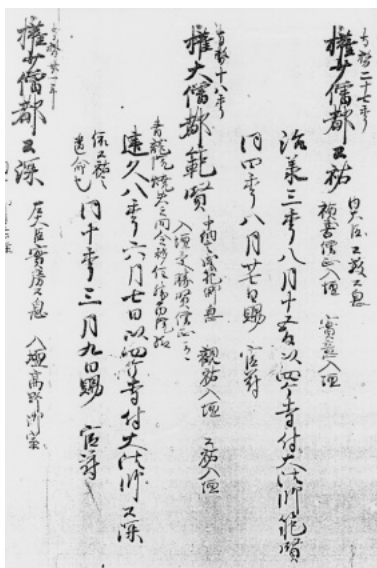


図4 『三箇寺 石山 禅林 観心 座主次第』
「石山寺座主次第」
京都府立総合資料館

し座主として寺院の宝物、聖教類を手にとったであろうことは十分に考えられる。もうひとつ注目しておいてよいのは、範賢が名目的とは言え座主として在任中、『平家物語』に活写されるあの文覚が神護寺の復興事業に活躍していたことである。

後期院政期の絵画制作を論じるにあたり心に留めておきたいのは、信西一門のふたつの性格である。まずほとんどの男たち（中には女性もいた）が学識者であった。このことは現在唱導文学として位置づけられている表白や願文などの漢文による著述を多く遺していることに表れている。そして一門の多くが皇族と親しい関係にあったということである。

第三章 通憲・信西入道

信西自身は上記一門の性格をふたつながら持ち合わせていた。彼は皇族の幾人かと非常に親しい関係にあった。鳥羽院の判官代として近任、鳥羽院第四皇子の雅仁が後白河天皇として即位し、治天の君となつてから近臣のリーダー役をつとめた。信西はまた待賢門院に院司として仕え、美福門院とも政治的につながりを持っていた。彼は詩人（主に漢詩）でもあり、歴史家でもあり、ジャンルの境界を越えた著述を行っていたことはよく知られている。その著述には唱導文学の範疇にびつたりはまる願文などもある⁽²³⁾。彼はまた後述するように絵画作品制作に関わったこともあるが、密教図像の制作・編纂に主導的役割を果たした三名の僧と関わりを有していたらしいことは十分に評価されていない。そこでまず信西と常喜院阿闍梨心覚（一一一七—一一八〇）との関係からみてゆきたい。心覚は常喜院の

外に仏種房や、宰相阿闍梨と呼ばれ、浩瀚な『別尊雜記』の編述者として知られている。さらに信西と勝定房恵什（一〇六〇—一一四五）との関係を検討してみたい。恵什は最も古いとされる密教圖像集『圖像抄』、『十卷抄』の編纂者と考えられている。そして最後に天下第一絵師とうたわれた禪那院の珍海已講との関係の可能性について探ってみたい。無論これらの関係性については明瞭ではなく、これまで学問的関心をほとんど集めてこなかったが、改めて検討に値するものだと考える。

まず、信西と心覚の関係であるが、双方が若年の頃、天承二年（一一三二）法成寺三重塔落慶供養に参列していることに注目したい。⁽²⁴⁾

通憲は堂童子として、心覚は錫杖衆の一人として参列していたが、互いにそれに気づいていたかどうかはつきりしない。互いの存在を意識しえた可能性は、ほぼ十年後二人が久能寺経の名で知られる装飾法華経の制作に関わった時であろうか。観普賢経卷末に「前日向守通憲、少納言信西入道」とあり、法華経不軽品に「弁阿闍梨心覚」とあることから、二人が国宝久能寺経の結縁衆であったことが分かる。⁽²⁵⁾久能寺経制作の事情についてはまだ不明なことが多々ある。例えば、はっきりとした制作時期、各品に奥書が書かれた時期、それぞれの結縁者が担当する巻の装飾にどれほど個人的に関わったのかなどである。この経巻の問題に取り組み研究者は鳥羽院後宮におけるグループの拮抗状況に目を向けがちであった。待賢門院と女御（後の美福門院）をめぐる派閥に属する人々、それぞれに仕える女房たちがこの装飾経の制作に主な役割を演じていたのである。⁽²⁶⁾無論、派閥の対立があったとはいえ、法華経書写は基本的に縁を結ぶ事である。それはほとけとの縁といっても、信西と心覚はこの事業に「共に」

結縁衆として参画したのである。（残念ながらどの程度、この二人が共同したのかもまた不明である）

この久能寺経と信西一門には他にも結びつきの可能性が存在するようだ。安樂行品の奥書から待賢門院中納言が結縁衆のひとりであったことが分かる。また俊成の『長秋詠藻』から待賢門院に仕えたこの女房が、ほぼ久能寺経の制作時期に法華経経文から採られた題を回覧して「歌結縁」を請うていたことが分かる。⁽²⁷⁾さらに法華経薬草喻品の見返には待賢門院中納言がおくった題にもとづいて俊成が詠んだ歌が葦手絵の手法を用いて絵画化されたと考えられている。

実際の関係は不明だが題、和歌、見返絵、一品経、これらは澄憲の表白に表された待賢門院の題に関わるように見受けられるのである。信西の妻紀伊は待賢門院に仕え、また画家として宮廷における絵画制作に関わったようである。西行の歌によれば、彼は紀伊とも近い関係にあり、康治二年（一一四二）のはじめ頃、彼は一品経の勧進をおこし、歌を詠むよう懇請したこともあった。⁽²⁸⁾ここには鳥羽院と待賢門院も関わっている。さらに西行の歌には法華経と観普賢経の経文を合わせたような和歌があり、その詞から生れた連想は当時の人々にさぞ普賢・十羅刹女を想起させたに違いない。この歌は後述べるように序でふれたタイプの絵画の文学的表現ととらえられよう。

概観しただけでも分かるように、信西と心覚の関係を含む久能寺経制作をめぐる問題は非常に複雑であるが、確実な新史料の発見をまたずともこの二人の関係を示唆する証拠がある。

心覚の『鵝珠鈔』に少納言入道（信西）が不動八方神旗法なる密教修法を安鎮法と比定していることを紹介している。心覚は不空（七

○五―七七四)の業績を記録した円照(生没年不明、七世紀後半)の『表制集』を引いて、信西の教示を改めて確認している。⁽²⁹⁾『鵜珠鈔』のこの一文は問題となる二人の関係を確認するようであり、信西の学識の広さを伝えるものでもある。

さて第二の人物、信西が関わりをもったと思われる勝定房恵什に移ろう。信西が心覚に伝えた密教修法に関する情報の源は、『十巻抄』の編述者恵什であったと思われる。⁽³⁰⁾不動八方神旗経法を安鎮法とする意見は、十三世紀の『秘鈔口決』⁽³¹⁾に信西と恵什の名とともに記されている。

私後加事

尋云、安鎮法、大師将来無之、如何。安鎮法、宗叡僧正将来、天寶十五載、安祿山欲侵去(玄)宗皇帝、不空修此法。一行著甲冑太刀ヲ膝下ニ持。彼時ノ八方神旗経法者、即安鎮法也。通憲入道、試問真言師之時、恵什答云、彼八方神旗経法者、即安鎮法也。⁽³²⁾

ありそうもない人物の設定であるにもかかわらず、この話で恵什が修法の内容をはっきりさせた能力は見事であるが、それにもまして真言の修行者に密教の知識を試す信西の役目には興味深い。多くの史料から信西はしばしば鳥羽院の使者としてあらわれ、大学出身の儒者の資質を彼らの漢詩の出来映えで確認したように、彼はおそらく院の代わりに恵什の知識を試したのだと考えてよいだろう。

(推測にすぎないが、この信西との邂逅があつて初めて『十巻抄』が鳥羽院から注文されたのではないかと想像してみたくなる)

田島公氏は十三世紀の『三僧記類聚』における宮廷の文庫・宝蔵に関するいくつかのエピソードを貴重な註解を付して紹介している。⁽³³⁾

卷十二の二十五によれば少納言通憲(信西)が鳥羽院の使者として仁和寺円堂宝蔵の実検にあたった際に、恵什ともう一度居心地の悪そうな出会いを果たしている。ここでは人骨の念珠が穢にあたるかどうか、迦葉の正しい文字のことなどをめぐって議論は険悪な方向に向かったようである。⁽³⁴⁾

『三僧記類聚』、第十二卷、二十五話

運助、本寺物語等、元久三年正月廿八日、本寺供養法次、語之、

一、本寺東宝蔵二宇内、西ノハ舍利会舞装束等納_レ之、東ノハ円堂宝蔵也、累代宝物等被_レ納_レ之、高野御室御時、宇治入道殿、

申_三事由於院、令_レ覽_三宝物等給、運助其時十四・五之比也、少納

言通憲、為_二院御使、參上開_レ之、恵什闍梨參会、合_三目六_一之間、

通憲度々被_レ供云々、迦葉之葉字事、分明不_レ語、但故法眼御物語ナリ、又人骨念珠ア

り、通憲恐_三觸穢_二不_レ觸_一手之由示_レ之、恵什難云、於_三公物_一者、

一切無_三其憚_一云々、

故法眼御物語給云、葉字事ハ葉葉共同字也、而通憲為_三別字

之由示_レ之、恵什難_レ之云々

恵什、類通憲ヲソシル間、高野御室、令_二長尊法橋、權律法了、師カ、于_レ時、非_レ穢、令_レ制

止恵什_一給云々

〔中略〕

一、被_レ止_二勅封_一事

紫金臺御室、鳥羽院ヨリ令_レ賜給テ、永被_レ止_二勅封_一了、鳥羽勝光

明院宝蔵モ同時令_レ給タマフ云々、大原宰相入道、刑部小輔ニテノ

時、為_二院司_一參上シテ被_レ開_二勅封_一、而運助開_レ封之間、引チキリ

テ中ヨリ切了、アサマシアヤマチト思ナカラ、令_レ進之処、執行

俊祿持參、院司小輔サシツ_一テ、見テ我嚴親アリト申云々。

この不愉快な会合は信西が後に左大臣藤原頼長と決定的な対立にいたる伏線のようにもとれる。この二人の組み合わせと同様、信西・恵什はその性格や気質があまりにもよく似ているようである。恵什は仏典の本説を頑固に追求し、正当性を主張するやっかいな人柄で知られている。師と義絶し、覚鑿と論争し、彼の弟子中御室覚行法親王（一〇七五—一一〇五）が親王としての特権を駆使し上席に就けば恵什が憤慨して寺を飛び出すこともあった⁽³⁵⁾。

本研究にとってこの逸話が示す大事な点は、信西が仁和寺において勅封の宝物に接することが可能であったという事実である。この話の大詰めで大原宰相入道なる人物が顔を出す。最後の部分の言葉めぐつてはさまざまな解釈が可能であるが、入道は「我嚴親アリ」の印が彼の父の手になることを発見したようである。大原宰相入道の異名は信西息修範のことを指しており、修範がここで父の手蹟として認知したことからすれば、信西がある時には勅封宝蔵の責任者であったと考えることができるだろう⁽³⁶⁾。

信西と関わりをもった三番目の人物について論じる前に、恵什の『十巻抄』相承に関する『三僧記類聚』に載せる逸話に目を向けておきたい⁽³⁷⁾。

『三僧記類聚』第十 六十一「十巻形像抄事」

保壽院僧正并隆海法印持^(寛成カ)之、未^(寛成カ)流^(寛成カ)布世間、彼本ニハ三マヤ形

圖無^(寛成カ)之、裏書是多、至^(寛成カ)三院本^(寛成カ)ハ三形圖存^(寛成カ)之、裏書大略無^(寛成カ)之、

鳥羽院御本、美福門院令^(鳥羽天皇皇后・藤原得子)傳御、爰有眞僧都申預持^(給カ)之一本、私

書持^(寛成カ)之、又令^(寛成カ)讀^(寛成カ)忍辱山僧正^(寛成カ)云々、件御本ハ自^(後白河カ)法皇^(後白河カ)被^(後白河カ)召、

仍令^(後白河カ)進^(後白河カ)之了、被^(後白河カ)安置^(後白河カ)于蓮花王院寶藏、

已上、略^(後白河カ)記^(後白河カ)之、

後聞、件書未^(蓮花王院)被^(蓮花王院)納^(蓮花王院)寶藏^(蓮花王院)之間、義仲乱之時、紛失了、而自^(源)他^(源)所^(源)不慮^(源)出來、宮令^(源)沙汰^(源)取給、但欠^(源)三四ヶ卷、一・三・四・六、

それによると鳥羽院による『十巻抄』の書写事業は、鳥羽院没後その皇后であった美福門院（十二世紀中期の政争にあつて信西の支持者であった）のもとで行われた。やがて『十巻抄』は寛遍僧正（一一〇〇—一一六六）の手に渡ったことは明かである⁽³⁸⁾。美福門院から『御手印縁起』を賜ったのもまた東寺一長者、高野山金剛峯寺座主寛遍僧正であったことは偶然の一致というわけでもない。この『御手印縁起』は不思議なことに美福門院が故鳥羽院の宝物中に発見したものであった⁽³⁹⁾。『御手印縁起』は現在十世紀末から十一世紀前期の偽文書と考えられている。しかしそこに示される高野山の境界絵図は極めて有用であった。高野山の支配階層はしばしば領有地をめぐる争論の相手に対してこの文書の権威をふりかざしていたのであった。この文書の不可思議な発見は信西が記録莊園券契所を再興した直後のできごとであった。新たな官僚組織における主導者のひとり信西の嫡男俊憲で、彼が高野山における美福門院発願の事業の願文作者でもあった⁽⁴⁰⁾。ちょうどこれは美福門院が高野山に影響力を増大させていた時期でもあった。美福門院の一切経施入は荒川莊の寄進と一具のものであり、当莊園を女院領として認めたのは後白河院の新たな院庁であった。その文書には信西の三名の子息が署名している⁽⁴¹⁾。恵什の『十巻抄』相承の話題にもどうう。『三僧記類聚』によれば当本は宮廷に戻され、後白河院の蓮華王院寶蔵に納めるよう命じられた。この院の寶蔵は信西息静賢が管理していたのである。

心覚、恵什が図像編纂者としてその名が知られている一方で、珍海已講は東寺本歡喜天図像の銘記が語るように「天下一絵師」とう

たわれた著名な仏絵師であった。その他、記録によれば珍海（一〇九一—一一五二）は博識で、能弁な僧であり、著述家としても著名で、画僧でもあった。醍醐寺周辺の伝称によれば若き心覚が三井寺を去り真言密教の研鑽に励んだのは珍海に論破されたことによるという⁽⁴²⁾。この話は珍海筆とされるいくつかの著名な作品と同様安易に信ずることはできない。伝珍海画といえれば最も有名な作品として醍醐寺光台院の国宝渡海文殊図があげられよう。美術史家の意見では珍海没後一世紀あたりに位置づけられる作品である。

一方で東大寺から出た「俱舎曼荼羅」については、珍海の三論教の造詣の深さ、「法華堂根本曼荼羅」との構図の関連性を考えるならばより信頼のおける伝承と思える⁽⁴³⁾。本図はポストン美術館蔵で十二世紀には天竺で描かれ東大寺法華堂に奉懸されていたと考えられていた。この画題と由来は作品の背面に添付されていた銘文による。東大寺別当権大僧都寛信（一〇八四—一一五三）別当在任は久安三年—仁平三年（一一四七—五三）は珍海が根本曼荼羅の修理を行ったことを記し、「已講大法師珍海、殊令修補、是家風尤巧畫図之故也」と述べている。この記録には久安四年（一一四八）三月の年記がある⁽⁴⁴⁾。

信西もまたこの時東大寺法華堂に関わっていた。『筆海要津』（信西孫海惠僧都撰。内容は願文を主とする信西の述作。醍醐寺の親快が十三世紀中期に書写）の一文によれば信西は法華堂の夏衆のために願文を制作している。法華堂は一一四八年に夏衆主導のもと修理の最中であった。信西と珍海はこの時遭遇していた可能性⁽⁴⁵⁾がある。

このふたりのつながりにはもうひとつ可能性がある。信西と絵画との関連で研究者が指摘してきたことに鳥羽院の数度にわたる四天王寺参詣時における絵解のことがある。ここで院はしばしば聖徳太

子絵伝絵解聴聞、法会出席、舍利拜見をし、念仏講讚などに出席している。この参詣における信西の役割はかならずしも明確ではないが、久安四年（一一四八）—法華堂の修理、珍海の法華堂根本曼荼羅修補が行われた年—秋の参詣記録には信西の役割が詳細にわたって明瞭に記録されている⁽⁴⁶⁾。鳥羽院が聖徳太子絵解を聴聞する間、信西と頼長が両側からその解説の誤謬を訂正し、欠を補ったというのである（次御絵堂令僧説絵于時、余與信西侍左右、僧有謬誤改正、僧有闕偏補綴」『台記』）。この参詣は頼長にとって忘れがたい印象を残した。彼の日記によれば翌日、院は已講忠春（一〇九八—一一四九）の能弁な説法に感涙にむせび、さらにその翌日帰京の途次、信西・頼長が院より舟の屋形に召され、「我朝之故事」についての質問されたのに対して信西が停滞することなく答えるのを見て、頼長は一言も加えることもできずただただおそれいったという⁽⁴⁷⁾。

前年（久安三年）からの参詣における信西の役割は記録上明瞭ではないが、少なくとも記録によれば聖霊院の絵解、舍利会、空海・大江匡房の書拜見、そして院や高位の貴族達によるめでたい管絃の宴が行われた。これには信西も参加して『古今著聞集』「管絃歌舞」に収められた鳥羽法皇の天王寺念仏堂における管絃についての説話の素材となったのである。この四天王寺参詣にふれたのは珍海撰述と伝えられる説話集、『日本感通記』に、「少納言通宣入道尋西」なる人物が語ったという四天王寺の舍利に關わる奇瑞譚が入っているからである。この名は文字、読みから見て通憲・信西を指しているとしたか考えられない。しかも物語の日は久安三年九月二十日、すなわち実際の四天王寺御幸の日程に入るのである⁽⁴⁸⁾。珍海は明かに信西の物語を記録している。残念ながら珍海が信西から直接聞

いたという証拠はない（しかしただちに否定しうるものでもあるまい）。後で絵巻制作の問題に関してこのふたりの関係については改めて述べることになるが、ついでにふれておくと珍海の説話集を引くいまひとつの作品として『長谷寺験記』がある（ここには『吉備大臣入唐物語』も含まれ、また、永井義憲氏が紹介した鎌倉後期写の長谷寺本では、安居院の説草も登場している）。

絵師としての珍海の話は、自身が記録した説話よりもはるかに多い。信西の曾孫、醍醐寺座主憲深がしばしば語ったと思われる話によると、珍海が空海の仁王経曼荼羅の秘められた内容を前述の寛信法務に明かしたために醍醐寺の鎮守清滝権現の怒りを買って、逝去するに至ったという⁽⁴⁹⁾。憲深がこの話を語った時に、この絵そのものは三寶院経蔵にあったともらした。

以上の話や他の話に出てくる珍海と絵画の話は醍醐寺住の信西の子孫たちによって著述されている。これらの話を総合すると勝賢は珍海の絵画に接したことがあり、またこれを管理する立場にあったことは確かなようだ。つまり、勝賢は珍海の愛染明王図を後白河院に進じたり、浩瀚な図像集編纂で知られる覚禪が、三寶院経蔵にあった空海の仁王経曼荼羅の欠失部について質したりしているのである⁽⁵⁰⁾。近年紹介された三寶院経蔵目録（この編纂には勝賢も関わっていた）によると珍海と彼の父基光の絵画が、珍海の仁王経曼荼羅とともにこの寺の什物であったという⁽⁵¹⁾。

珍海と信西の関係にはもうひとつ三論学派の法流を反映したものがある。珍海の重要な弟子に長門法印敏覚（一一二一あるいは一一三二—一一八二）がいる。彼は後に東大寺別当に補される。敏覚は信西の養父高階経敏（生存確認時期 一一一一—一一三三）の子息である。信西と敏

覚は継兄弟というわけである。敏覚はまた信西息明遍の師で、明遍が敏覚の堂舎、經典類、賞讓による地位を付属されている⁽⁵²⁾。

信西と心覚・恵什・珍海の関係をたどると、しばしば皇室と関係のある寺院と関わりあっていることが分かる。そこには特権を有したもののしか近づくことができない宝蔵がある。信西が訪れたこのような場所をあげると、まず仁和寺円堂院宝蔵（『三僧記類聚』の恵什のエピソード参照）、東大寺法華堂（『筆海要津』参照）などがあるが、信西が実際訪れたところにはさらに立ち入りが困難な場所もある。鳥羽院のために貴重な品々を鑑定する信西の能力は伝説化されているが、たどってみると、事実とも受け取れるような場合がある。おそらく最も詳しく記録されている事例は当世紀に初めて開封された正倉院への立ち入りである⁽⁵³⁾。比叡山前唐院での鑑定の話はフィクションにしか出てこないが、信西のパトロンであった鳥羽院の御幸時の貴重品拝見の記事は信西自身の編集した『本朝世紀』に詳述されている。したがって貴重品拝見時の信西の存在とその積極的な役割についてはそう簡単に伝説に過ぎないと片付けるわけにはゆかない⁽⁵⁴⁾。宇治の平等院宝蔵の宝物については間接的な知識しか持ち合わせていなかったようだが、勝光明院の場合には明かに宝物に直接接することができたのである。

勝光明院での真言仏教聖教類については同時代の醍醐寺の聖教（金沢文庫蔵）で確認がとれる。すべての事例にわたってその詳細を明かにすることは不可能であるが、信西と鳥羽勝光明院の一例については詳しく検討してみたい。勝光明院は鳥羽院の時代に皇室の宝蔵として機能していた。

次にあげるのは金沢文庫で所蔵している日付不明の要文の断簡で

ある。これは鎌倉末のものらしく特に慎重に扱わないといけないが、言わんとするところは覚鑿上人（一〇九五—一一四三）が勅許を得て特に秘すべきものとされた『小野六帖』を拝見した後、信西の自宅で記憶に基づいて書写されたものだという。⁽⁵⁶⁾

鳥羽院奉受

高野正覚房後兵衛悉願遠、院宣伝之、覚法親王仁和御室、高野正覚房参御前給。令見六帖之書給、一見後、於通憲入道之家、

暗書六帖

現存する当文書群の奥書から考えると、覚鑿が『小野六帖』を書写し、それを院の許しを得て鳥羽宝蔵の本文と校合したらしい。卓抜な記憶力、書写した場所など、この話には信じ難いものがある。当断簡は後世のものであるし、曖昧さのつきまとう話だが、信西に關してはほとんど同時代から記録が存在し、それが同類の信西イメージを提供しているのである。

次にあげる例は金沢文庫の聖教類に収められた一連の文書である。通憲の名を含む詞章のほとんどは高橋秀栄氏の一連の非常に貴重な資料集、「平安・鎌倉仏教要文集」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』50、51、52号）による。醍醐寺の阿闍梨であり研究者でもある柴田賢龍氏の御助力で、このほとんどの聖教が醍醐寺理性院から出たものであることや、最も重要な詞章の語り手は理性房賢覚（一〇八〇—一一五六 文書では法眼御房）や、語りの記録者は賢覚の弟子で中でも主導的立場にあった宗命（一一一八—七〇）であることが判明した。下に引く一文は日付を欠いているが通憲の名を含む他の文は彼の出家直後のものであるが、日付を欠くため文章中の院、一院の比定は困難である。白河院か鳥羽院かは不明とせざるをえない。また主語を

欠いているため解釈もむずかしい。内容の要約にあたって、人物の比定を試みてはみたものの解釈については確信を持つにはいたっていない。

初めの一文は『授与記』（No. 一一八・六）からとられている。これは空海の遺告に見られる宝珠の材である百心樹沈について賢覚と通憲入道が交わした会話の記録である。この中で賢覚は通憲が『小野六帖』の編纂者仁海僧正の著述にあると述べたと語っている。通憲によればこの事は院の命で目録を作製した際に見たという。⁽⁵⁷⁾

遺告宝珠合藥之中二

百心樹沈者、百ノ香樹ノ沈歟、通憲入道被申、法眼御房云、仁海

僧正自筆抄物中ニ百心樹事アリシ、院ヨリ目録シテ御文シタタメヨトアリ

シ時、一見仕シニイミシクアマタ物トモラコソ書出サレテ「候？」シカ云々、以

是案是ニ、百香靈沈、愚僧カ案ニ相叶事歟、或云ツケノ木沈云々

次は『太元』（No. 二七二・九）からの一文である。話題は再び小野僧正仁海の文における百心樹沈である。小野僧正の法文が十四合あって一院に渡された文には確かに百心樹沈の事が書かれていた。しかし通憲にはどうしてもどこに記されていたか思いだすことはできなかったという。また通憲が言うには十四合の手箱にあった阿弥陀に關する法文によると、決定往生の真言の出典やこの真言で多数の人々が浄土往生できると信じていることを述べている。⁽⁵⁸⁾

通憲入道申云、小野僧正之十四合之法文手箱、一院傳テ候文ノ

中ニ宝珠合藥之事記中ニ、百心樹トテ慥ニ被記、但失念之事トテ不

令申其名云々

（中略）

通憲入道、法眼御房令謁給時物語申云、先年之比、小野僧正十四

合ノ手箱一院ニ伝リテ候ニ、法文ヲ日記仕シ中ニ、阿弥陀之事日記
セラレタリシニ、此決定往生之真言ハ出馬般舟經ト云々、此真言ヲ
持テ多ク往生之人ヲ我ト被日記云々

次は「慈尊院四卷書第一伝授記」からの一文で、これは国立歴史
民俗博物館蔵田中穰コレクションのものである。⁽⁵⁹⁾これには信西に関
する伝承が記されているが、真言勧修寺系の慈尊院で出回っていた
ものらしい。ここには鳥羽宝蔵における小野の法文十四合の説明が
ある。即ち雨僧正（仁海 九五―一〇四六）の自筆聖教類四合に加
え、他に弘法大師空海を含む四名の真言高僧の聖教が含まれていた
という。これらの聖教類は範俊僧正（一〇三八―一一二二）代に皇室
に奉られ収蔵されたのである。弘法大師の手になる法文二合は後に
院の命（少納言信西がこれを受けた）で蓮華王院宝蔵に移管、それが鳥
羽院の宝蔵にあるというのである。これはかなり後の延元元年（一
三三六）の記録で、史実に反する内容を含んでおり（蓮華王院建立は
信西歿後）、額面どおり受け入れることはできない。とはいえ少なく
ともなんらかの事実に基づいた部分もあるように思われる。興味深
いことにこの話の源は成宝僧正（一一五九―一二二七）で、彼は信西
息、醍醐寺の勝賢の弟子であった。⁽⁶⁰⁾

延元々年九月二日、四卷書第四卷伝授了、此次御物語云、鳥羽
宝蔵ノ小野聖教ヲ四合八合ト号ス、「四合ハ？」大師御筆御聖教
也、八合ハ、一合貞観寺一合般若寺一合石山一合延命院、四合阿雨⁽⁶¹⁾僧
正、已上、範俊僧正ノ時ニ被籠之内、大師御聖教ニ合ヲ蓮華王院
宝蔵被渡之由、少納言信西入道院宣鳥羽宝蔵在之彼院宣ハ勧
修寺律師へ被成云々、成寶僧正律師時事也、

鳥羽僧正範俊はまた白河院に宝珠を奉ったと言われている。『覚

禅抄』の記載によれば勝賢が覚禅に父入道（信西）は勝光明院でこの
宝珠をみたことがあると語ったという。このことから信西（そし
て勝賢）が宝蔵でこの貴重な宝物を接したことは確かなことの方
である。⁽⁶¹⁾

この話は別のところでも確認できる。信西が正倉院でその博識ぶ
りを鳥羽院の前で披露した際、彼はその典拠として中国の稀観典籍
―『三礼図』を示したのである。興味深いことに同名の書籍が『通
憲入道蔵書目録』に載っている。さらに「信西筆」と記される『異
朝明堂指図記』と題された図入り写本が石清水八幡宮に存在する。
これには久安四年（一一四八）六月二十一日付けの沙弥信西の記名が
ある。『石清水文書』の編者はこの作品に「少納言入道信西、藤原通
憲、西王宮正堂正寝勘文」と題しているが、結局は「信西筆トアレ
ドモ、原本ヲ検スルニ当時ヲ去ルコト遠カラザル時代ノ寫ニカ、ル
信西ノ自筆ニアラザルニ似タリ」と結んでいる。⁽⁶²⁾この宮殿建築につ
いての考察は数種の中国の典籍から得られた知識を基にしており、
『三礼図』から採られた図を入れている。当文書の手蹟の問題は文
書の真偽に関わるが、信西がこの時宮殿の性格についての議論に関
わっていたこと、『本朝世紀』久安四年六月十八日条からわかるよう
に報告を求められていたことは確かである。⁽⁶³⁾

目録といえ、書物や宝物の単なるリストから内容豊富な注釈付
きのカタログ、目録まで様々だが、信西とその一門の学識が語られ
る際にはしばしば話題となっている。上述したように、信西と恵什
は仁和寺円堂宝物点検の際に目録を徴しているし、信西と賢覚の会
話には目録作製の作業が話題となっていた。⁽⁶⁴⁾知識の体系化、特に著
述作品の目録化への傾向は、信西が寺院の目録作製に際して受けた

相談や自身の書物目録に示されるばかりでなく、彼の子息、静賢、勝賢、覚憲もまた宮廷や寺院の書物目録の作製に積極的に関わっていたのである。彼らは単なる観察者ではなく、自ら実物を調査し、それを目録化したのである。この作業には調査対象を理解しそれを整理しうる知識を必要とするのであり、彼らはカタログというかたちで新たな知の体系を創造したと言えるのである。

しかしながら彼らが編んだ中でも最も有名な目録、通憲の名を冠した目録が本当に彼の蔵書を示しているかについて疑義をはさむ研究者もいる。⁽⁶⁵⁾ 皇室の蔵書であるとする意見、あるいは後白河院息二条帝の時代に編まれた目録だとする説もある。伝承を重んじて信西の蔵書とする研究者もいる。私見では所蔵者の問題はいずれかに決定することは不可能だと思われる。しかし『三礼図』が示唆するように信西がこれらの書物に接することができたことは確かだと思う。

信西の嫡男俊憲が二条帝の東宮学士であったこともまた留意すべきことである。彼もまた皇室の宝物に接するにふさわしい人物である。

勝賢は江戸初期編纂の『醍醐寺新要録』以来、三宝院経蔵の聖教目録作成者と考えられているが、彼の力のほんとうの幅広さは近年の現存目録公刊をもって初めて知ることが可能となった。勝賢が斬新にして広範囲にわたる聖教目録作製に関わったように、『吉記』によれば信西息静賢法印もまた蓮華王院の執行として古い『蓮華王院宝蔵目録』を実際の書物や宝物を検分し目録作製に関わっていたのである。⁽⁶⁶⁾ 『興福寺別当次第』によれば信西息覚憲は治承五年五月二十三日、院御塔執行、一切経執行に任ぜられている。この役職は興福寺焼亡後の聖教類復興事業をとまっていたことは確かである。⁽⁶⁷⁾ このことは『讚仏乗抄』に収められる治承五年（一一八一）五月の『聖

教書写一結冥助善』と題された文書で分かると考えている。（近年当本の内容は覚憲の弟子解脱房貞慶の撰述とされている）⁽⁶⁸⁾ この一件は覚憲の主導になると思われ、文書では治承四年年末の南都焼亡を「法滅之期」と呼んでいる。またここでは写経者に聖教の書写を行わせることを述べ、書写すべき聖教として一千巻をあげ、また或る人物、おそらくは前年に亡くなった覚憲の師蔵俊（一一〇四―一一八〇）が遺した事実について語っている。この文書には十一件の貴重な聖教の題が羅列されているが、安元二年（一一七六）に皇室に奉進された蔵俊の『注進法相章疏』にはそのうち八件があげられているのである。⁽⁶⁹⁾

第四章 勝賢と図像の制作

当章では信西息勝賢ならびに彼に関わる人々に焦点をあてる。勝賢は東南院院主であり、本寺東大寺別当、醍醐寺座主であった。図像制作の観点から勝賢を論ずるに先だって、彼は天台安居院の祖と目される兄澄憲と同様、唱導における主要なジャンルである表白、願文の制作を行っていることに注目しておきたい。著者はこれまでに「勝賢表白集」として知られる散逸作品集の復原につとめてきた（題名とは裏腹に全ての作品が表白というわけではなく、むしろ表白そのものは少なく、多様なジャンルのものを含む）、そればかりか全てが勝賢の著作かどうか明確ではない。しかしおそらくは勝賢の作品である可能性は高い。⁽⁷⁰⁾

室町時代の醍醐寺僧、法蓮院相覚法印（一三五二―一三九二）の目録は様々な伝勝賢作品を拾い上げている。⁽⁷¹⁾ 勝賢の「表白集」は「相

『覚記』からとられた十二種の他の作品と共に「覚洞院勝賢の著書」として挙げられているのである。左の四書は相覚の目録に含まれるこの研究にとって最も大事な作品である。

『金界念誦賦』 一卷

『香鈔』 一卷、於高野鈔集数本

『葉鈔』 一卷

『表白集』

勝賢は密教修法、密教伝承の識者として著名で、本来顕教に属す唱導についてはそれほど知られていない。ましてや画家としても図像編纂者としても全く知られていないと言ってよい。しかしながら勝賢弟子の深賢を祖とする醍醐寺地藏院の絵画目録には「聖観音像、一、「鋪」、勝賢法印筆」とあって、勝賢が少なくともこの聖観音図に関わっていたことを示しており、十三世紀後期に醍醐寺では彼がそのように記憶されていたのである。⁽⁷²⁾

勝賢はさらに重要な図像である高雄曼荼羅の白描写本に参与していたと考えられている。これは真言密教においてもっとも権威ある両界曼荼羅であり、その源は空海の制作にまでたどることができるのである。⁽⁷³⁾勝賢の署名はその残存六巻のひとつに出てくるが画家としてではない。勝賢は心覚本に基づく写本を所有していたらしい。心覚は明らかにこれをその師兼意（一〇七三―没年不詳）から相伝している。勝賢の甥で弟子でもあった成賢は院政末期に醍醐寺座主であったが、後にこれを相伝し、興味深いことに現在長谷寺に伝わっているのである。

勝賢と心覚は互いに密教の知識を共有していたことが認められる。たとえば醍醐寺のいくつかの聖教には勝賢経由で遡って心覚までた

どれるものが存在する。若き成賢もまた心覚と関係があったことはあまり知られていない。上述した勝賢の「表白集」中の願文から成賢と心覚の関係や心覚の没年を確定できるのだが（信西の『本朝世紀』から珍海の没年を知ることができたように）、当願文から理趣会曼荼羅が心覚のために制作されたこともみえる。概して追善供養などの法会のために作成された願文、表白は仏画、仏像にふれているのだが、残念ながら制作者の名を留めるものはあまりない。

心覚から兼意に遡ることができると文書の一例が勝賢筆の『香葉鈔』（ニューヨーク公共図書館ペンサーコレクション蔵）に見える。勝賢は永万元年（一一六五）六月に高野山往生院で心覚の文書を写し取っている。勝賢が醍醐寺を追われて当地ですごしていた時期、両者は頻繁に学問上の交流を行っている。図像に分類できるものではないかもしれないが、この書写作业は勝賢の筆の才、図を写し取る技能を示す一例といえる。この『香葉鈔』は兼意による類似したふたつの作品から心覚がつくったものと考えられている。当写本は三本の一具の一部で、『香葉図巻』として知られる一巻の図巻をともなっている。この『香葉図巻』もまた勝賢の手になるものと考えられており、同じセットの『寶要鈔』は成賢の書写になるものと言われている。⁽⁷⁴⁾

『香葉鈔』はいくつかの理由で魅力的な作品といえる。まず、彼の三宝院を受け継ぐ人々にとっては、これは勝賢のものと考えられて、高野山で編纂されたもののようなものである。⁽⁷⁵⁾また『相覚記』があげる書がこれにあたるようである。⁽⁷⁶⁾次にこの本の多くの引用文が示すように、中国の原典（世俗の韻文、賦にも及ぶ）への並外れた学識と精通ぶりを窺わせていることである。書写校合のどの段階でこうした

引用がなされたのか不明であり、特に写本紙背の部分についてはなおさらのことはつきりしない。この写本の性格を考えるならば、勝賢の「表白集」には、賦は勝賢の兄弟である相公が得意とするものと言っていることは興味深い。著者はこの相公とは信西の嫡男、俊憲と考えている。この『香葉鈔』に反映されている知識に関して言えば、心覚の『鶴林鈔』や他の聖教類から、信西は香の専門家であり、少なくともひとりの真言高僧にその秘義を伝授しているのである。⁽⁷⁷⁾この博識ぶりは『通憲入道藏書目録』にもうかがえる。そこには知識源であった本草関係など関連するいくつかの書名があげられている。

兼意作とされる「原テキスト」に用いられている言葉や知識のほとんどに典拠があると指摘されているが首肯しうる意見である。『香字抄』はそのなかでも最たるもので、少なくとも信西撰の可能性が高いことを示唆する研究者がいる。⁽⁷⁸⁾さらに興味深いことに高山寺の『禅上房書籍缺目録』の付注には「丹波抄五卷」とあるが、それに続く註記には「本云永萬二年九月以相公入道之本更補缺」とあって「相公入道之本」で欠を補っていることが示されており、その後「東寺沙門勝賢」の署名があるのである。次いで「香抄葉抄三合為五帖」と書かれていて、「香抄」、「葉抄」(「相覚記」は勝賢撰とする)合わせて五巻であるとするのである。一門内部における知識の伝達を理解する上で大事な点は、勝賢が相公入道本を書写しているという事実である。相公入道を信西と考えるむきもある。しかし、信西は相公、つまり参議に昇っていないが、彼の嫡男俊憲は参議になつていたのである。信西の後継者として俊憲は父の蔵書を承継したことは十分ありうることである。俊憲は信西が「数千巻之日記」

を所持していたことを書き留めている。⁽⁷⁹⁾その意味で藤原資房(一二〇二—一一五四)の日記『春記』(京都国立博物館蔵)紙背に勝賢の名が永万二年の年記とともに記されていることに注意を向けたい。⁽⁸⁰⁾ここで信西から後継者俊憲へ、更には彼の弟勝賢や成範へとこれらのテキストが伝授されたという想定が可能となる。成範はまた俊憲の『貫首秘抄』を所持していたのである。勝賢が『勝賢表白集』で俊憲の新賦における熟達ぶりを賞賛していることからこの想定は支持されるだろう。信西の書籍目録にはまた『新賦略抄』を載せているが、中国の同時代の書籍目録には見えないもので、日本で制作されたものであろうと考えられている。⁽⁸¹⁾(俊憲自身の撰述でさえあるかもしれない。)伝播の流れがこれとは少々異なる例として『江談抄』の異本である『水言鈔』がある。これは俊憲を経ることなく信西から直接勝賢に、そして成賢へと伝えられたと思われる。⁽⁸²⁾

知識の伝承のさらなる事例として、特に凶像を含んだものがある。『土巨鈔』には尊勝曼荼羅が、兼意から心覚、勝賢へと流れたのではなく、さらに古くて、もともと鳥羽僧正覚猷(一一〇五—一一四〇)から出て複雑な流れをたどったことが詳細に語られている。このエピソードは成賢によれば「覚洞院僧正令執給ヲ、舎弟ノ宰相入道逝去之時モ、為彼追善被凶繪云々」⁽⁸³⁾とあって、勝賢が故宰相入道のためにこの凶像を用いたことが分かる。

特に凶像に関して言えば、心覚だけでなく、勝賢の周囲には驚くほど多数の凶像制作者や凶像について造詣がふかい学僧が存在したのである。ここではその概略を示すに留め、それぞれに簡単なコメントを述べてみたい。

まず勸修寺慈尊院系の理明房興然(一一二二—一一三三)は凶像研

究者として知られてはいるが画像画家としては考えられていない。興然はおそらく院政期の後半にあつて最も博識で、多くの密教上の知識を集成した人物であつた⁽⁸⁴⁾。彼はその弟子少納言阿闍梨覚禪（一四三—一二三以降）と共に大阿闍梨勝賢の最初の伝法灌頂の記録に伴僧として現われている⁽⁸⁵⁾。興然自身は明らかに勝賢の弟子と認められていたが、彼らの関係は深いものでも、長きにわたるものでもなかった⁽⁸⁶⁾。しかしながら興然は初期には大事な節目で勝賢に仕えたといえるだろう。

次いで興然の弟子覚禪に注目しておきたい。彼は例の浩瀚な画像ならびに画像関連の知識を集成した『覚禪鈔』の撰者である。覚禪は密教の知識や画像を学ぶ過程で勝賢に師事したのである。『覚禪鈔』のうちのいくつかの章や多くの付注は勝賢によるところが大きい。覚禪の生まれははっきりしないが、彼の異名少納言阿闍梨から考えれば、父が少納言に任ぜられていたのであろう。もしそうなら勝賢、覚禪共にその父は同じ職にあつた⁽⁸⁷⁾。推測にすぎないが、勝賢主導の法会に伴僧として初めて共に史料に出ているところをみれば、興然と覚禪をつなぐ役割を果たしたのは勝賢であるかもしれない。この法会は後白河院の法住寺で行われたと思えるが、勝賢はこの場所にはしばしば滞在したようである⁽⁸⁸⁾。

三番目に取り上げるのは石山寺の文泉房朗澄（一一三—一二〇八）である。彼は石山寺で聖教類の収集に携わつたことで名高い僧侶である⁽⁸⁹⁾。彼は勝賢から伝法灌頂を受けているがその時期は共に年がたってからのことである。朗澄は勝賢の甥である石山寺座主範賢と同時期に活動し、双方共に観祐（一一一〇—一二六三以降）の弟子であつた。観祐は現存するいくつかの画像を書写しており、先述し

た香葉に関する兼意の書物を所持していた僧でもあつた。朗澄は石山寺の『蘇悉地手契図』や『大正新修大藏経』（画像部、第六巻）の不動明王図などいくつかの画像作品に関わっている。

四番目の人物は行善房真海（？—一一八四）。彼は江戸期には本朝第一とうたわれた絵師であつた。中国で絵を学び、彼の地で画家たちの賞賛を得たと言われている。三宝院道場を飾つた尊像などいくつかの優品が彼の手に帰せられている。また珍海や宅間法眼の師としても讃えられている⁽⁹⁰⁾。残念ながらこれらの功績にはほとんど確証がない。現在では真海の絵画も記録もほとんど残っていない。我々が知ることができるのはただ真海という人物がかつて存在し、勝賢や成賢と関係があつたということだけである。覚禪と同じように真海は勝賢の最初の伝法灌頂に奉仕し、勝賢は彼のために申文を作成しているが、これは『勝賢表白集』に載せられている。勝賢はまた真海の桜町内堂供養の導師を勤めている。この堂は、後に成賢が真海から譲渡された勝俱胝院にあつたらしい。当研究で非常に重要なことであるが清瀧権現の図様、性格を論じたのがこの真海である⁽⁹¹⁾。

第五に浄勝房賢増（一一二九—一二〇五）。彼は以上の四人ほど知られていない人物である。しかし明らかなのは勝賢に師事し、文治五年（一一八九）彼から伝法灌頂を受けていることである。彼の名はまた絵巻にもなつた『地藏菩薩応驗記』にも見いだせる⁽⁹²⁾。この応驗記から第六番目の人物が浮かび上がってくる。勝賢の弟子地藏院深賢である。彼は応驗記を書写し、感銘を受けてこの尊名にちなんだ名を住房に付けている。深賢については本研究後半で更に詳しく考えてみたい。

ここで勝賢の兄、貞憲に話題を転じてみたい。彼もまた醍醐寺に

住したことがある。信西の次男貞憲はこれまで美術と関連付けて語られたことはない。ひとつには彼の若い頃のことがそれほど詳しく残っていない、また出家後のこともほとんど分からないからである。

平治の乱で父信西の死とともに突然官を解かれることになるが、それ以前の貞憲の世俗人としての経歴は『台記』、『兵範記』、『山塊記』などの当代貴族の漢文日記の記録からたどることができる。政治的ヒエラルキを昇りながら一時の成功をおさめたかに見えるはしたものの、最後には解官の憂き目にあつた彼の遅まきながらの政治的人生は、しかしながら、まさに平凡という言葉がぴったりあてはまる。

貞憲の最も早期の補任は飛驒守のようである。これがいつのことかはっきりしないが、『兵範記』によれば仁平二年（一一五二）三十歳前後で、貞憲は刑部少輔に任ぜられている。同記によれば彼は鳥羽院庁で判官代として奉仕している。保元元年（一一五六）父信西たちの党派が勝利をおさめると、貞憲は太政官に少納言の地位を得ることになる。一一五八年には貞憲は多くの重要ポストに補任されている。まず太政官の右少弁に、そして右衛門権佐に、また撰津守、二条天皇の蔵人、そして再び判官代（今回は後白河院庁）などである。翌一一五九年には権左少弁に転じ、加階されて従四位下に、最終的には右中弁に任ぜられている。また新たに設置された上西門院庁に奉仕することになった。これが彼にとって最後の宮仕えとなった。

官人としての職務、院庁での奉仕を果たす一方（宮中の諸宮とは私的な面にかかわるほど親しい間柄となった）、重責を担うほどの役職にあつたといえないものささまざまな宮中行事の行事を仰せつかつていた。例えば、法勝寺御読経、春日祭など手の込んだ宗教行事

や、即位式への参列、宮中での相撲などである。中でもおそらく彼にとつてもっとも晴れやかな場面は、保元三年（一一五八）勅使として東寺別当寛遍僧正から三粒の仏舍利を受けた時であつたろう。この仏舍利は天竺からもたらされたものを空海が請来したと考えられていたものである。

各種の人名辞典などの参考文献が触れる貞憲の事績はいつも簡略であるが、それがどんなものであれほとんどの場合、彼が歌人であり、その歌が勅撰集に採られていることには等しく触れている。貞憲に帰せられる歌をあれこれ探す作業は簡単ではないのだが、一首だけはつきり分かる歌があつて、『千載和歌集』に収められ、またほぼ同時代の『月詣和歌集』にも少しだけ形を変えた歌が載せられている。

ここにあげる『千載和歌集』第九哀傷、五九二番目の歌の詞書にはこの歌が詠まれた状況が語られ、当歌を貞憲のものとしている。

母の服に侍りけるほどに、又紀伊の二位身まかりける時、詠みて侍りける、

「限りありて二重は着ねば藤衣涙ばかりを重ねつるかな」⁽⁹³⁾

先の『月詣和歌集』の詞書では紀伊の二位ではなく「やしなひたる母」となっている。⁽⁹⁴⁾『千載和歌集』を編んだ藤原俊成（一一一四—一二〇四）はこの勅撰集の準備にあつた時、貞憲の家族状況になじみのない広い読者層に対して、明らかにとはつきりと固有名をさしはさんだのだろう。我々が『千載和歌集』の詞書から知ることができるのは紀伊二位が信西家においては北の方的存在になつたこと、そして紀伊二位は永万二年（一一六六）前半に没したと考えられており、

貞憲の実母はそれより少し前に亡くなったと考えてよいということである。

貞憲はもうひとつの勅撰集に顔をだしている。ただし歌人としてではない。彼の名が別人の歌の詞書に見いだせるのである。それは十四世紀前期の『玉葉和歌集』で、顕昭法橋の作とする歌の詞書には次のようにある。

藤原貞憲朝臣出家の後、高野にこもり侍りける時、大原の坊に

まかれりけるに、あはれなる事を障子にかきて侍りけるをみて、

そのかたはしにかきつけ侍りける。法橋顕昭

おもひける、心のみゆる 玉章は

ぬしにかたらふ 心ちこそすれ⁽⁹⁵⁾

角田文衛氏は信西一門に関する豊富な知識をもとにこの詞書からひとつの物語を編んでいる。読本系平家物語は、建礼門院に仕えた阿波の内侍を弁入道貞憲の娘としていることに基づいて、角田氏は貞憲の大原庵が平家物語最終章に出る寂光院に進化していた⁽⁹⁶⁾。

この詞書から、当時の六条藤家歌学の中心的存在であった顕昭と歌の上でのつながりがあったということが知られるばかりか、貞憲が出家して一時大原、高野山に住したことが知られるのである。鎌倉後期の『伝法灌頂師資相承血脈集』(真言密教の小野流の血脈集⁽⁹⁷⁾)を調べると生西という僧が貞憲のことであるらしい。この生西は醍醐の無量寿院を中心とした松橋流の祖とされる松橋已講一海(一一一六―一七九)に師事しており、生西の房号は乗蓮房である。僧侶としての彼の基本的な伝記情報は江戸中期の『伝燈廣録』続編⁽⁹⁸⁾に見える。この非常にコンパクトな伝記には、先の『師資相承血脈集』以上のものを生西についてほとんど知ることができないが、ひとつつ注意す

べきことが書かれている。それは彼がああ有名な解脱上人貞慶の父であり、信西の息子だというのだ。このそっけなくも骨子だけは残している伝記は現代の参考図書『日本仏教人名辞典』などにそれ以上の情報も付加されずに繰り返して掲載されている。そして重要な日付、彼が一海から伝法灌頂を受けた年や彼の歿年はどこにも見当たらない。

しかしながらそれらの時点は確定できる。彼が一海から伝法灌頂を受けたことは未公開資料、三宝院文書第二十五卷『醍醐寺無量寿院務法流相承』の『血脈松橋流』に仁安二年(一一六七)二月二十八日と記されているのである。歿年月日はそれほど定かではないが治承四年(一一八〇)十一月と考えられている。この歿年は『讚仏乗鈔』のいくつかの諷誦文中の対句の解釈から導かれている。この資料は貞憲の子息、貞慶の作品の集成であると認められている⁽⁹⁹⁾。

実を言えば十数年以上前にふたりの著名な研究者の論文に生西の重要参考資料が引かれたことがあったが、この時には生西とは何者かについては問題にもならなかったし、それを確定することなど問題外であった。中野玄三氏は一九七〇年に新出の峯定寺仁王像の胎内銘について論じた時、当像の発願者の一人である生西についてどんな人物か確認できないとした⁽¹⁰⁰⁾。しかしながら、生西の仁王像発願、彼の父通憲／信西撰述とみえる峯定寺の『大悲山寺縁起』に生西が寺の渡橋の大施主人とされて、また彼の子息貞慶が当寺に重要な奉納をしていることなどを考えるならば、生西という僧侶はかつては貞憲として知られていた人物その人ではないかと思われる。貞慶のサークルの活動と舍利、經典、釈迦如来像の峯定寺への奉納は近年とみに関心を集めているが、なかでも特に研究者の関心は十四世紀

前期の『春日権現験記繪』の制作背景にある⁽¹⁰¹⁾。生西はいわば通憲／信西と貞慶を結ぶミッシング・リンクとも言えるだろう。そしてこの三世代を結ぶ線はベクトルの矢のように、十三世紀中期の大和国を指し示している。この時期、この一門は興福寺をベースとしてこの大和という場に影響力を發揮していたのである。そして、この絵巻制作の理解へと導いてくれるであろうベクトルについては、その矢が向かっているコースを見極める必要があるが、紙幅の関係上、ここではそれを論ずる余裕がない。

生西についての手がかりを示したもうひとりの研究者は阿部泰郎氏である。彼の革新的ともいえる論文「宝珠と王権」が一九八九年に出版されるや、研究者の注目を広く集めた。先駆的に開拓した研究領域は、現在でも日本、西欧の研究者によって調査研究が進められて⁽¹⁰²⁾いる。日本の王権の権威を増さんと舍利を儀礼に用いた密教僧の役割を論じつつ、阿部氏はまた月ごとの観音供の意義を説いている。この観音供は数人の高僧によって天皇の日常生活空間で執り行われるものであった。彼が注目したのは観音の正体をめぐむる問題（これは何代にもわたって密教儀礼を執行する僧たちの関心事で、曖昧模糊としてやっかいな問題であった）についての文書に生西という署名があったことである。阿部氏はこの文書を醍醐寺文書から引いているが、註記までは引いていない。そこには「件生西ハ少納言入道信西ノ息也、(中略)上醍醐妙徳谷居住」と記されているのである⁽¹⁰³⁾。この註記は十七世紀初期の醍醐寺僧で、当寺の聖教類の保存に中心的な存在であった義演准后(一五五八―一六二六)の日記の記述によく似ている。その慶長七年(一六〇二)三月十一日条には、その名前を加え、この情報がある記によるものとだけ注記した次のよう

な記述が見える。

或記云、件生西ハ少納言入道信西ノ息也、貞憲、弁入道、法名乗蓮房生西云々、上醍醐妙徳谷居住⁽¹⁰⁴⁾

妙徳谷とは意教上人頼賢(一九六―一二七三)と関係ある地で、おそらく無量寿院のあった場所だろう。頼賢は貞憲の甥成賢の愛弟子の一人で、また貞憲の曾孫浄信(一九一―一二四〇)の弟子でもあった。彼が無量寿院の管理を貞憲のもうひとりの孫全賢(一一八四―一二三三)から引き継いでいるのである。

全賢といえば、金沢文庫に蔵される膨大な聖教類、そして生西によって書写された驚くべき量の現存聖教類の発見があったことに思いが至る。『雑鈔』、または『別尊法可習事』(四三・四、一二七・六一、一二七・六・二、一二八・一五・一、一二八・五・二、一一八・四)と題された写本に記されたいくつかの校合奥書のひとつに、松橋流第三世全賢が当時松橋厚造紙と呼ばれていた彼の祖父の写本を、絵師であり三寶院成賢(一一六一―一二三三)と親しかった孝賢律師に送ったと記されているのである。成賢は彼の叔父生西の書を編纂、書写させ、しかる後にその書は松橋流というよりはさかんに三寶院の僧侶たちの間で師資相承に即して流通している。当本の照合や関連する写本類から分かることは、さらに数百ページの長さをもち、多くの奥書を持った教巻の聖教類があつて、その奥書から一一六〇年から七八年にわたって生西が海から数多くの密教修法に関する伝授を受けていたことが確認できる⁽¹⁰⁵⁾。

近年、この生西の名は画像の生成というこれまでとは別なコンテキストで注目を浴びている。日本文学、日本史、日本宗教史の研究者はこの十年間、日本中世における知のありようとその位置づけを

行うために目録の研究に力を注いできた。誰が何を何時知ったのかを学ぶ取り組みの中では、あいまいな言葉で記された奥書、古い写本類のほとんど判読不能の書写者などがこの研究の主たる対象である。心覚の多くの作品を載せる最も古い目録に見える註記から浮かび上がるのは、生西は心覚在世中に心覚の全ての作品についての情報を集めていたことや、生西が心覚のパトロンの立場にもあつたということである。⁽¹⁰⁶⁾興味深いことにこの目録の記載される題名に六巻本の『別尊雜記』が見えるのである。⁽¹⁰⁷⁾

未公刊資料『土巨抄』は生西を含めた信西一門の人々について貴重な情報を集めた宝の山である。この『土巨抄』は覚洞院親快(一一一五—一二七六)の述作で真言の秘義や地蔵院深賢が語った伝承などを収めている。その内容は主に深賢が彼の師成賢から得た教えで、そこには勝賢に関する口伝も少くない。⁽¹⁰⁸⁾

『土巨抄』の「貞憲弁入道受法事」は次のように語り始められている。⁽¹⁰⁹⁾

『土巨抄』深賢述親快記

貞憲弁入道受法事

師云、弁入道貞憲、逢一海已講並亮惠阿闍梨、随分ニ受法事有之、而先于師匠ニ入道逝去之刻、件兩人ニ所受習口決等之書ヲ皆悉可返遣本所髓ノ者也ト被預テ置解脱房ニ、仍任遺言被返送畢、

私云、所伝授亮惠口伝小单子、号別尊雜記、件鈔信貴定心房書写之ケルヲ、師主被見之、仍予書写之、本文極根籍也・・・

当条はさらに重要で、かつ詳細な説明を続け、別の条では生西、亮恵にも言及している。しかし我々の当面の関心は亮恵と別尊雜記

という書名にある。

まず、確かだと思われるのは、生西と亮恵の関係を詳しく語るこの挿話は記述者の記憶違いや、書写者の想像の産物でもないということである。亮恵(一〇九八—一一八六)はまた真乘房とも云い、醍醐寺三宝院の阿闍梨を務めた。醍醐寺金剛王院で灌頂を受けたがもともとは大和元興寺に付属していたらしい。彼は法相寺院であつた内山永久寺に真言密教をもたらしただけで著名である。永久寺は廃寺となつているが、かつてここに在った絵画や慶派の仏像彫刻でよく知られている。真言と法相が混合した興味深い場所なのである。

この混合ぶりは鎌倉時代初頭から当寺で行われた年中行事の一覧や、行事の際に読み上げられる寺への貢献者の結衆交名によく表れている。興福寺とも関わりをもつ最高位にある法相の僧侶たち、亮恵や密教を継承する僧侶たち、これら有力な僧侶の中にまじつて弁入道生西の名が見える。残念なことになぜ生西が永久寺の交名に載るか確たる証拠が見つからない。⁽¹¹⁰⁾

さて『別尊雜記』の問題にもどろう。『土巨抄』の挿話ではこれを亮恵の作としているが、そうなると同じ総称的なタイトルをもった心覚と亮恵による二本の違った作品が存在したことになる。しかし、一九二四年に高野山大学図書館主催の聖教類の展覧会用に発行された簡略なカタログがあつて、そこには展示された聖教の題名とともに奥書が示されている。数多くのめずらしい聖教と魅力的な奥書に交じつてそこには生西の名が二度見えている。

最初は『諸尊雜記』と題された写本。これは貞元二年(一一〇八)大和菩提山正曆寺で顕良が書写した一本である。奥書に先ほどほとんど同じ話が書かれている。つまり当本は弁入道貞憲が内山で真

乗房阿闍梨(亮恵)から奉られ、生西が示寂してその息解脱房侍従已講貞慶が父の遺言にもとづいて当本を送り返した。奥書はさらに続き、新たな情報を提供してくれる。つまりその後、内山の禅堂房が当本を禅順房に渡し、禅順房がこれを書写し、そして私がまたこれを「弁山寺」で書写した、というのである⁽¹¹⁾。

『諸尊雜記』 丙甲 (写) 一冊

白格紙 承元二年

終、承元二年五月十六日、於菩提山寺書了顯良

此書者、弁入道貞憲、於内山所被奉習、故真乘房阿闍梨也、而禅門入滅之後、於解脱房侍従已「講」貞慶沙汰、依禅門遺言、所被送本所也、其後内山善堂坊相伝之、以彼本同山禅順房所令写也、仍以彼本於弁山寺書写之了、

顯良

於彼門徒者、為最秘々々努不可書他門云々、猶残有云々

この最初の奥書によって、『土巨鈔』は単に『諸尊雜記』と『別尊雜記』を取り違えたという推測もでき、となれば問題は片づいてしまふ。しかしカタログに見えるもうひとつの奥書が問題を複雑にしている。ここには『別尊雜記』と題された作品の註記で、当本もまた菩提山寺で書写されているのである。奥書はこれが弁入道貞憲のと同筆だと主張している。生西と『別尊雜記』はここではつきりと関連付けられている⁽¹²⁾。

『別尊雜記』 真乙 付雜談 一冊

一 同 真初丙 一冊 同上

以上二ツトモ表紙ニ右下ニ(梵字)トアリ(真乙ノ終)(朱一交了)

承久二年六月六日、於南都菩提山寺東谷常光院、以一蓮房御本

書了、件本ハ弁入道貞憲同筆也、

(真初ノ終) 書本

已上四ヶ 法退出之刻略為談

本文に「雜談」が付されているという註記は気になるところである。「雜談」が云わんとすること、心覚の『別尊雜記』について何か云っているのかどうか、ほぼ一世紀見当たらないこの写本が発見され、再検討され、その内容が確認されるまで分からない。一九二四年に展示されたこれら聖教類はまだ高野山にあるかもしれないし、あるいは高野山大学図書館に寄託されているのかもしれない⁽¹³⁾。

生西が心覚の『別尊雜記』に関与したらしい形跡や大和地方への関わりを示唆する状況証拠は他にもないわけではない。唐招提寺(当寺は十三世紀初期貞慶のつよい影響を受けている)には二本の鎌倉中期の『別尊雜記』があつて、成賢と親しく生西の松橋流の僧侶、頼賢の署名がある⁽¹⁴⁾。生西書写になる聖教の大和における流布を示すもうひとつの材料は菩提山正曆寺蔵『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』で、これには仁安三年(一一六九)正月十四日付けで生西の署名がある⁽¹⁵⁾。

生西に関する当章を結ぶにあたって奈良国立博物館蔵の一連の『辟邪絵』のなかの残忍な「天刑星」について若干の推測をしたい。どうみてもこの図はユニークだ。たまたま石山寺校倉聖教コレクションの一枚の聖教に弁阿闍梨のことが記されているが、内容の不明確な奥書がある。それにはあきらかに「天刑星」の壇のことが書かれている。これもまた弁阿闍梨貞憲(生西)のことだとしたら更なる探求に値するだろう⁽¹⁶⁾。

「石山寺の研究…校倉聖教編」には次のようにある。

『天刑星壇方』 一通

石山校倉聖教、第二十五函

(本奥書) 本云

嘉禄三年六月十二日書写了

(端書) 此弁阿闍梨御房

私且也方 三十一座

本研究の前半の最後に、勝賢の甥、勸修寺の理趣房貞玄に焦点をあててみたい。彼は上述した勸修寺の民部卿権僧正成宝の多くの灌頂弟子のひとりで、『覚禪鈔』⁽¹⁷⁾撰述者、覚禪のたったひとりの弟子である。叔父の勝賢同様、貞玄は東大寺と関わりがあり、建久五年(一九四)の再建落慶供養に参列した僧衆に名前が見いだせる。彼は言葉を巧みに扱う唱導家、権威ある凶像を作成した凶像家でもあった。その知識は身近な環境ばかりでなく、一家の何代にもわたる蓄積に依るところが大きかったに違いない。その意味で貞玄は信西一門において僧侶の系譜を形成する人々の典型例といえよう。

その短い一生のなかで貞玄は、宮中の最勝講会には問者、そして最終的には講師として参加し、院政と関わりの深い場になった法勝寺御八講⁽¹⁸⁾では参列している。これは仏教世界において成功をおさめる道のりの第一歩であった。彼はまた興福寺の維摩会講師も務めており、『恵日古光鈔』⁽¹⁹⁾に出る三論宗学僧五十九名のなかで二番目に多く引用された僧侶でもある。引用される頻度の高い学僧には信西一門が何人かいる。貞敏、定範、明遍あるいは彼らの身近にいた敏覚の息、貞乗がいる。

本研究の関心は、貞玄の文章レトリックの技術ではなく、その凶像編纂への関与にある。貞玄の奥書を持つ『覚禪鈔』の写本は四十

巻ほどが現存している。彼がその全巻の書写をしたのではないかと推測されてきたのも無理はない⁽²⁰⁾。貞玄自筆とされている巻の貞玄の奥書は全て覚禪のすぐ後に書され、しかも日付は師の生存中である。覚禪自筆本はいまだ一巻しか確認されてはいないので、貞玄は師と連携しつつコレクションをつくりあげていったのではないだろうか。貞玄自筆本の影印が『覚禪鈔』勸修寺本として最近発刊されていることを付け加えておきたい。

貞玄の奥書に続くさらなる奥書を有する一連の、『覚禪鈔』写本は醍醐寺無量寿院(院政期後期には彼の親族が管理した)にちなんで松橋本と呼ばれている。これらの巻ではほとんど貞玄の奥書の後に頼賢(すでにのべたように成賢の筆頭弟子。東大寺蔵『別尊雜記』書写者)の奥書が続いている。彼は一二四〇年代に法華山寺で書写作業を行っているが、これは本研究の後半でふれることになる。

『覚禪鈔』万徳寺本の「五大虚空藏法」に付された頼賢の奥書は興味深い。

寛元三年三月二十七日 於西山法花寺写之畢 此写本故理趣院
律師自筆等也

明玄律師之時為東南院法印、定範、被借取之間

今松橋書中所無仍以理生院彼本写之 頼賢

この寛元三年(一二四五)三月二十七日付けの奥書は貞玄を名前ではふれず、貞玄の別名、理修院律師で表している。更にこの本は東南院法印定範(勝賢の甥。東大寺再建落慶供養にも参列)が明玄(貞玄の従兄弟)から借りてしまったため松橋には無いということも書いてある。ここに、信西一門のネットワークが凶像情報のやりとりをする中でどのように機能していたか、その具体的な事例をはっきりと

見ることができるのである。

【注】

(1) 小松茂美氏の絵巻に関する膨大な論考、中野玄三氏の仏教図像に関する論考には信西一門の誰かの役割については論述のついでにしばしばふれられているものの、個々人や一門そのものが論考の焦点となつてはいない。

(2) 一門の人々を描いた早期の絵としては、『平治物語絵巻』における信西はともかくとして、信西息成範の興味深い作品が二点現存する。そのひとつは田中教忠氏旧蔵で京都国立博物館蔵の肖像画。(田中家旧蔵コレクションの大部分は醍醐寺から出たもので、現在国立歴史民俗博物館におさめられている)。これは成範集断簡の見返絵に描かれる肖像画で、明かに『治承三十六人歌合絵』の一部である。この肖像を見るといくつかの点で『釈教三十六人歌仙絵』に類似している。ここには彼の甥である解脫房貞慶の像と歌が入っている。もう一点は藤原光能像と目される画像であるが、『神護寺靈宝目録』と『集古十種』から分かることは、江戸時代を通じて当肖像画は成範とされていた。神護寺の僧侶がなぜこうした像主の間違ひをおかしたのか今後の研究に俟ちたい。

(3) この重要な研究は田中幸江氏・神田邦彦氏編「日本漢文学研究の世界の拠点の構築」中世部会事業推進資料。(磯水絵氏を代表とする二松学舎大学二十一世紀COEプログラム 二〇〇五・三)

(4) 青木淳氏はこの点に関して特に積極的に論じている。氏は信西一門に焦点をあてたいくつかの論考をこの十年間に発表している。それらは以下のとおりである。「快慶作遣迎院阿弥陀如来像の結縁交名―像無納入品資料に見る中世信仰者の「結衆」とその構図―」『佛教史學研究』第三十八巻、第二号(一九九五・一二)、「東大寺僧形八幡神蔵の結縁交名―造像を中心とした中世信仰者の結衆とその構造―」『密教図像』十二号(一九九三・一二)、「空阿弥陀佛明遍の研究(Ⅲ)―中世高野山における「結衆」とその背景―」『印度学佛教学研究』四二―二(一九九四・三)。

思うに醍醐寺の聖教類や表白集の精読によってこれまで見逃されてきた慶派仏師と信西一門のいくつものつながりが明かになる可能性が

あるが、拙論においては絵画に限定して論じるつもりである。

(5) 小林美和氏は『平家物語』の生成過程における信西一門の役割という厄介な問題に取り組む研究者の一人である。「延慶本平家物語の成立」(『あなたが読む平家物語』一九九三刊)参照。小林氏の研究は「信西とその子孫」(『日本文学史院紀要』一九八七)で信西一門の役割に初めて注意を向けた学者のひとりである市古貞次氏の流れにある。

日本文学研究においては四人の著名な研究者が信西一門に持続的に関心を示し続けている。阿部泰郎、牧野和夫、山崎誠、小峯和明の諸氏である。歴史家の五味文彦氏もまた同様の関心を示し続けている。木村真美子、中村文の両氏は信西一門の人々が果たした絵画以外の文化的貢献について重要な論考を発表している。

(6) 他の例をあげるならば

1) 『玉葉』によれば、養和二年正月十二日(一一八二)澄憲僧都は故皇嘉門院(聖子)のために結縁「一品」経供養のために講師を務めているが、そこには「女房等手自所奉図」の普賢菩薩併十羅刹女図が奉懸されていた。これは女院の小袖の絹であつただろう。というのも「改御衣。元所御著御小袖雖不浄依平生之仰」と自らの意志で指示していたからである。

2) 海恵の『海草集』の「八條院普賢供養表白」によると、八條院の発願により普賢供養が行われた際に、「母儀仙院(美福門院)平生之手筆」をつかつて普賢薩埵・十羅刹女図が制作されている。

3) 正嘉元年八月十四日(一二五七)、聖憲は故承明門院追善のための一品経供養の導師を勤めたが、そこでは普賢菩薩像一体併十羅刹女形像各一体が女房たちによって奉納されていた。『承明門院御忌中諸僧敬白指示抄』

4) 嘉元三年七月十日(一一三〇五)、覚守僧都 伏見上皇による故後深草院の一周忌御仏事で覚守僧都が導師を勤めたが、ここでは普賢菩薩、十羅刹女絵(唐女)の二幅が「先皇平常之御衣」に描かれた。『公衡公記』

5) 嘉元三年十月二十八日(一一三〇五)、大僧都憲基が導師を勤めた故亀山院の追善供養には普賢菩薩併二聖二天十羅刹女像一舗が図繪された。『後伏見帝奉為亀山帝修冥福願文』、『本朝文集』

(7) 奈良国立博物館

(8) 『十二巻表白集』は一二〇〇年前後、守覚法親王周辺の学僧集団による

産物と考えられている。これには澄憲の兄弟、俊憲・勝賢の作品も含まれている。

- (9) 『翰林拾葉』はさまざまなジャンルからなる文集。大谷大学図書館蔵の二十三巻の『翰林拾葉』の最初の二巻には、東寺観智院の杲快(一六三四—一七〇三)が書写した十二巻本『表白集』の最初の六巻が収められている。牧野和夫「十二巻本『表白集』三集、影印(一) 実践女子大学文芸資料研究所『年報』第九号(一九九〇・三)。

- (10) 疑問のひとつはいったい歌題がどのように用いられたのかということである。おそらくはこの企画のきっかけを作っただけかもしれない。

- (11) 『門葉記』巻第七十二、勤行法補六、御産御祈目録に見える(大正新修大藏経 卷十二 p.五八三—九〇)。建長六年(一二五四)正月廿六日、大宮院のために、安居院第九世聖憲・文応元年(一二六〇)二月六日、同院のために、聖憲・文永二年(一二六五)七月三日、東二条院のために、聖憲・延慶三年(一三一〇)二月、広義門院のために、安居院第十二世覚守・正和二年(一三三三)二月、同院のために、安居院第十五世澄俊、等々。

放光仏供養について、清水邦彦氏がいうように「原史料には、「放光仏」とあるが、祈願の内容から放光菩薩を指すと考えられる」と解釈していいのであろうが「日本における放光菩薩信仰の展開」『比較民俗研究』十六号(一九九九・九)、安居院の導師が勤めると、必ず「仏」となっているのは気になる。

- (12) 主要なセットは天文五年(一五三六)の年記を有す。(小松茂美『続々日本絵巻大成』伝記・縁起編六・東大寺大仏縁起、二月堂縁起 一九九四)、『大勧進重源—東大寺の鎌倉復興と新たな美の創出』(奈良国立博物館)二〇〇六。『東大寺大仏縁起』の出版は、建武四年(一三三七)以前成立の二十巻本の『東大寺縁起絵詞』である。小山正文「東大寺縁起絵詞」の成立と諸本 同朋学園『仏教文化研究所紀要』第九号(一九八七)。そのプロトタイプは元応年間(一二三九—一二)前後成立の『東大寺記録』である。阿部泰郎、山崎誠編『古文書集一』、『真福寺善本創刊』第八巻、臨川書店(二〇〇〇)。

- (13) この盛儀は『吾妻鑑』、『東大寺統要録』に詳述されている。
(14) 勝賢、覚憲のほか、信西の孫貞覚、権律師信憲、律師範賢、権律師貞敏、権律師成賢、観俊已講、定範已講、聖覚已講が供養の盛儀に参加していた。権律師成実のことも信西孫とされるようだが、『東大寺統

要録』ではこの名前は成実とも貞実とも書かれる。『尊卑分脈』にも混乱があるようで、僧貞実(信西の曾孫として記される。この人物の出自についてははっきりしたことは不明である)。

- (15) 醍醐寺の僧侶達。彼らは勝賢の灌頂弟子あるいは勝賢の著述によれば非常に近い関係にあったと思われる僧侶、勝賢の座主職を継いだ実継、蔵有、宗遍、宗厳、能遍、季厳であった。この時に勝賢の勸賞を譲り受けたのは定範であり、寺家賞をうけ定範と同様に権律師に上がったのは東大寺の理真という僧侶であり、信西一門と慶派仏師とを結びつける存在と推定する。

- (16) 僧綱位にある僧侶の他に、信西孫縁成、興福寺の範信、東大寺の貞玄・恵敏もまた参加していた。

- (17) 憲深の家筋には不明な点がある。『尊卑分脈』によれば信西孫通成侍従の息。しかし通成は記録に顔を出すことはない。憲深の父は土御門通宗息で、後嵯峨院の母で没後に皇太后の称号を贈られた土御門通子の兄弟である通成侍従(生没年不詳)とする研究者もいる。通宗息通成に子がいたかどうか不明。同様な地位にあった二人が同時代に存在したのか、ひとりの通成侍従が別の家の養子となったのか分明できない。

「醍醐寺拳状土代」(醍醐寺文書一 一九函一)、『醍醐寺叢書』目録編、醍醐寺文書聖教』第六巻、p.四六六、二〇〇三年。なお、本文書は東京大学史料編纂所所蔵影写本『三寶院文書』巻五十にも所収)によると、この文書は憲深の立場から書かれているのだが、九条兼実(一一四九—一二〇七)息の九条殿僧都良海(一一八七—一二一八)と憲深との間に確かに関係があったことが確認できる。そこには「即僧都以憲深為嫡弟忝罷所帶少僧都被申補權律師畢、僧都長病之間如此被讓補之、其後入滅之時以件秘訣悉讓付憲深畢、憲深祖母者僧都之乳母也院依為使宣憲深為付屬也」とあって、憲深の祖母が僧都良海の乳母であるという。この祖母が憲深の祖父成範に嫁いだ人とすれば、彼女は、九条家の乳母というだけではなく、醍醐寺座主になった成賢の母親でもある可能性がある(『玉葉』正治二年二月二日条を参照)。
なお、この文書の別のくだりには、故九条殿下「兼実」の命により、実継大僧都が良海を瀉瓶弟子にしたとみえ、実継から良海へ、また良海から憲深へという師資相承のあったことが分かる。延慶本『平家物語』の「諸僧二被行勸賞事」には、権少僧都実継が大僧都に昇格する勸賞という史実に反する記事がみえるが、そうした記事が作成された

(18) 背景には、右の師資相承関係があるのかもしれない。信憲の父については不明。興福寺別当信憲は『尊卑分脈』に二箇所現

われる。これも養子関係を示唆するものか。本論考の目指すところは別にあるので、この問題については改めて考えてみたい。

(19) 世代が信西から離れると問題とする人物が何世代にあたるのか、信西の子孫かどうかあいまいになってくる。尊憲がまさにそれにあたる。尊憲の生年は一二三〇年代らしいが、彼の父の生存が確認できる記録は一二一〇年代以降見当たらない。

(20) 『華頂要略』によれば、安居院の指導者聖覚から直接たどれる子孫として、信西から第三世代に円憲(第五世、一二二四には活躍)、法印大僧都隆承(第八代、一二一六―四八に活躍)、第四世代に法印大僧都憲実(第十代、一二三六―八九)、第五世代に憲基(第十一代、活躍期一二六二―一三〇八)、法印大僧都覚守(第十二代、活躍期一二九一―一三二六)、第六世代には法印大僧都憲守(第十三代、活躍期一三一九―一三三七)、僧正良憲(第十四代、一二九九―一三七八)

(21) 安居院の他の指導者には信西の次男貞憲(一二三三―一一八〇?)の子孫がいる。信乘(第六代、活躍期一一九七―一二六六)、貞雲(第七代、活躍期一一九九―一二四九)、聖憲(第九代、活躍期一二二七―一二七二)

(22) 『百合文書』の乙号外三。同名の文書が東寺観智院金剛藏、題一四七合第二号にも見える。この文書によって神護寺の座主職が後に三寺につけられたことは明らかである。範賢の座主在任は治承三年(一一七九)八月十五日から建久八年(一一九七)六月七日まで約二十年にも及ぶ。

(23) 信西の文芸活動については、前引の『藤原通憲資料集』にほぼ網羅されていると言えるが、さらに山崎誠氏による信西の『筆海要津』を論じた以下の二論考が出版されている。国立歴史民俗博物館蔵「筆海要津」翻刻並びに解題、安居院唱導資料纂輯(三)

『調査研究報告』第一四号 一九九三。「藤原通憲の修辭学」(講座平安文学論究)第九輯 一九九三。『筆海要津』の重要さは、当本が唱導類から引かれた対句を含んでいること、そして信西の孫で仁和寺の学僧海惠僧都(一一七二―一二〇六)により撰述されて、親快(一二

一五―七六)によって書写されているところにある。親快は事実上勝賢の醍醐寺覚洞院を相承し、後述の『土巨鈔』を残している。

(24) 信西は堂童子として顔を出し、心覚は錫杖衆のひとりであった(平知信の『平記抄』天承二年二月二十八日条一一三三参照。藤田経世『校刊美術史料』続編 第一巻 p.三〇〇(九八)おそらくこれが心覚の初出記事か。彼こそは著名な密教図像編者として知られることになる僧で、ここでは園城寺僧に交じって心覚の名が見える。まさに密教図像編纂者心覚のことである。二年後同様の肩書きで右中弁(平実親)息として法勝寺金泥一切経供養に顔を出している(『中右記』長承三年二月十七日条)。

(25) 心覚は一般に宰相阿闍梨として知られているが、彼の父実親は永治元年(一一四一)十二月までは宰相(参議)に任ぜられていない。久能寺経はその年までには完成していたとほとんどの研究者が考えている。名前、官職名が何時書き込まれたのかという問題は難題である。通憲の場合、天養(一一四四)後半までは、つまり少納言に就任、出家するまでは少納言入道信西と呼ばれていない。

(26) 小松茂美氏は久能寺経の成立について幅広く論じている。最も長大な論文は「待賢門院と久能寺経―久能寺経の成立をめぐる」(『古筆叢林』第2巻 一九八九)であるが、そこで小松氏は現存する久能寺経が平氏により奉納され当寺に伝来したとする十四世紀の久能寺縁起からの推定を受け入れがたい議論とする。私見によれば結縁衆の中核は平実親一家であり、縁起にいう平一門の事業は久能寺経を指している。信西の『本朝世紀』は久能寺経になんらかのかたちで関わりと思われる二つの事について記している。まず鳥羽院が久安二年(一一四六)八月二十二日、待賢門院の忌日法会に際して勝光明院宝蔵の目録を書いているらしい(『法皇御覽鳥羽勝光明院宝蔵納宝物。即有被書目録』)。もし久能寺経が勝光明院宝蔵にあり、院自身が結縁衆の交名を書いたとしたら、結縁衆の名や官職名の矛盾や時間差の問題の説明となる。もうひとつは、鳥羽と皇后(後の美福門院)は三年後に別な納経に結縁している。この場合は、経巻は富士山に埋経されるべく久能寺のある駿河国に送付されている(久安五年五月十三日 一一四九)。この事が示唆するのは、大事な奉納経は地方に送られ、久能寺経が蔵された目される安楽寿院のような宝蔵には必ずしも保管されることはなかったのではないか。

(27) 『長秋詠草』為世自筆本(古典文庫五七七 一九九四)。なお、『長秋詠草』は治承二年(一一七八)五月、守覚法親王に奉進されている。

俊成は『長秋詠草』に待賢門院中納言から受けた題を取めたが、俊成がその歌集を仁和寺の御室に献上したことをきっかけに上西門院の拠点のひとつである仁和寺あたりでは待賢門院本人の自筆題が探し求められたのだろうか、澄憲の表白における言葉遣いからすると、待賢門院の自筆題はこの時期に再発見されたと考えられる。あるいは逆に、その自筆題の発見が俊成の記憶を呼び起こし、四十年近く前に自分が詠んだ歌とその題を歌集に入れることになったのかもしれない。

(28) 紀伊の逝去の際詠まれた十首が西行の『山家集』に見いだされる。西行が詠歌を懇請したことについては藤原頼長の『台記』永治二年(一一四二)三月十五日条参照。頼長は法華経不軽品書写を引き受けている。当品は久能寺経では心覚が担当している。

(29) この知見が信西から直接もたらされたものか、信西息勝賢を通じてもたらされたものか不明である。勝賢は心覚に父信西の博識ぶりを語っていたことは良く知られている。後者の例としては『別尊要記』巻四(『鶴林抄』とも。金沢文庫No.一一八・一〇・四)参照。『鶴珠鈔』の題は信西没後当本が発見された際に付けられたと言われている。他にも『心目少』などいくつかの別名を有している。『心目少』写本(金沢文庫No.二七一・四・一)には心覚と勝賢の高野山在任期における近い関係を確認しようと思われる記事が付加されている。

(30) 『十卷抄』は鳥羽院の注文によると考えられている。『凶像集』などとしても知られている。平等房永厳の撰述とされることもある。後世の真言系図像編纂者の多くが恵什の撰述としているように、ここでも恵什撰述説をとる。

現存最古の写本は醍醐寺所蔵の建久四年(一一九三)七月二十八日の年記をもつ一本である。時に勝賢は醍醐寺検校であった。当本に署名はないが、醍醐寺勝賢が所謂『目無経』を受け入れた時期に校合されている。『十卷抄』にはもう二本の最初期の写本が醍醐寺に所蔵されている。一本の見返しには成賢の書があり、もう一本には後述する深賢の奥書がある。このふたりは『目無経』の成立に関わっており、いずれも勝賢の弟子である。佐和隆研『醍醐寺聖教庫蔵図像抄録』『密教研究』七五号 一九四〇・一二。

(31) 『秘鈔口決』は勝賢の『秘鈔』についての口伝。記録者は憲深弟子の教

舜。多少内容を異にした逸話が高橋秀榮氏の「平安・鎌倉仏教要文集(上)」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』五〇号 一九九二・三)、『真言宗全書』第二十八巻で公刊されている。

(32) 覚印(二〇九七―一一六四)記、恵什述の『勝語集』には保延五年(一一三九)十月十一日、師の語ったこととして、不空の祈祷によって安西城の兵士を救助したことを記している。彼はこれに「或本一行有是誤也」と追記している。安西城が攻撃された時に一行が現われたとする話は天宝元年(七四二)の出来事で、一行の没年は記録によれば七二七年であるから、安祿山の乱(天宝十五年 七五五)における彼の役目についてはいうまでもなく、つじつまが合わない。しかしながら不空自身の『毘沙門儀軌』によれば安西城の攻撃に際して一行が大智不空を救済者として皇帝に推薦したと記している(大正新修大蔵経二十一 No.二四九p.二二八)。

(33) 田島公「中世天皇家の文庫・宝蔵の変遷―蔵書目録の紹介と収蔵品の行方―」(『禁裏・公家文庫研究』第二集 二〇〇六、p.八二)。「三僧記類聚」の完本、校訂本も公刊されていない。この節は牧野和夫氏「日堯撰『当要文集』巻上所引「日蓮伝」について―『元祖化導記』所引「或記」に関して」(『実践国文学』四三号 一九九三・三)にも部分的に翻刻されている。仁和寺写本の影印本が『仁和寺研究』(現在は廃刊)に掲載されている。

『三僧記類聚』に基づく『三僧記』は禅覚撰。興味深いことに『尊卑分脈』の異本(仁和寺本。単に『系図』と題される。)には禅覚は尊隆息、勝賢・成賢の弟子である深賢の兄弟と記される。

(34) 仁和寺宝蔵の人骨念珠の存在は藤原宗忠の『中右記』保安元年(一一二〇)四月二十四日条でも確認できる(巻五、p.二二六)。

(35) 覚行との事件は『参語集』に記されている(『国文東方佛教叢書』随筆』大正十五年、p.一〇。恵什の本説確認へのこだわりについては小川豊生氏の「院政期の本説と日本紀」(『仏教文学』一六号 一九九二)参照。

(36) 修範は出家後、宰相入道と呼称されるが、一一九〇年代前半編と考えられている『玄玉和歌集』三二五、三二六への詞には大原宰相入道の名で見えている。「有明の月いとあかくはべりけるに、またくもりもあへず雪ふり侍りけるを見て、大原宰相入道修範卿のもとにいひつかはしける」(p.三六一)管見では修範が刑部少輔に就いていたという証

拠はない。この官職には彼の兄弟であり、大原に居住していた貞憲が任ぜられていた（以下を参照）。貞憲はしかしながら官人としての生涯で宰相の地位にまでは登りつめていない。このふたりの兄弟についての記憶は、この話が記録された段階ですでに混同されていたようである。

- (37) この話「十卷形像抄事」(第十卷、六一)は前掲田島論文で公刊されている(p.八六)。類似した話としては、『普賢延命法、六秘々、三昧流』で、美福門院が鳥羽院の崩御の後、青蓮院蔵の「二九一箱」に収めてある天台宗の根本聖教の支配権を握っていたことが記されている。多賀宗集、『二九一箱』青蓮院蔵、『中世文化史、下』、法蔵館(一九八五) p.三三三—三七『日本歴史』二二六号(一九六七・一)。

- (38) 寛遍は信西一門とは別な筋道から関係をもっている。『三角院物語』(下)によれば彼は仁和寺で勝賢の早期の師であった。『三角院物語』(金沢文庫No.三二二、一一と一二)は別名『大僧正御物語記並醍醐三寶院伝授目録』(真福寺大須文庫 第五三函) 声明の血脈からいえば、勝賢は寛遍から大阿闍梨声明の流れを相承している(新井弘順「真言声明慈業系大進上人流の展開」『醍醐寺の密教と社会』p.三七〇)。信西と寛遍の往復書状(保元二年七月 一一五七)が万徳寺本『孔雀経法』下巻の紙背に見える(『覚禪抄』校訂本『覚禪抄 画像蒐成』仏教美術上野記念財団助成研究会研究報告 p.五九—六〇)。

- (39) 平治元年(一一五九)七月一日の寛遍寄進状によれば美福門院が「空海自筆之遺記」を鳥羽院の宝物篋の底から発見したという。「鳥羽院付属宝物之中披見篋底有草真書是則弘法大師自筆之遺記也」(高野山文書、続宝簡集二、『平安遺文』第六卷 No.三〇〇〇 p.二四六〇)。

- 事の本質からみて極めて秘すべき事柄であるにも関わらず、『報物集』には信西曾孫憲深の極楽坊における『御手印縁起』の三寶院校訂本との仰天すべき遭遇が記録されている。これは宝治三年(一二四九)の出来事のようにある。「二月十日、三寶院大師御筆等於極楽房拜見之、五筆之躰高野御手印縁起等之「也イ」不可説々々言語道断也」(『醍醐寺文化財研究所研究紀要』一四号 一九九四 p.一九九)。
- (40) 俊憲の莊園記録所への登用については『兵範記』保元元年(一一五六)十月十三日条参照。これは『醍醐雜寺記』(p.三〇一)にも記される。『根来要書』には俊憲作、美福門院発願の菩提心院供養願文二通を所収。

- (41) 貞憲、成範、修範の名が見えるのは『平安遺文』第六卷No.二九七九(p.二四四九)。角田文衛氏は信西嫡男俊憲の名が見当たらずに不可解としている(『後白河院の近臣』、『後白河院』所収 p.三五)。私見ではこの事態は後白河院派、美福門院派の反目が次第に増してきたことの反映と見ている。

- (42) 珍海が心覚を論破したことは江戸初期の『醍醐寺新要録』に見える。当本はさらに『愚問決岳抄』を引いている。

- (43) この絵画作品はもともと法華堂のものではなく、『釈迦靈鷲山説法図』とされていたという議論がある。以下の論文を参照。Matsumoto Moritaka, *The Iconography of Shaka's Sermon on the Vulture Peak and Its Art Historical Meaning*, *Artibus Asiae*, Vol. 53, No. 3/4 (1993)。

- (44) 寛信と信西もまた相識であった。寛信は信西が東山に発願した堂供養のために表白を作製している(日向守通憲堂供養、法務作)。「醍醐寺」表白集(第四二二函No.一三五)参照。築島裕「醍醐寺蔵本表白集について」(『醍醐寺文化財研究所研究紀要』六号一九八四・三)。
- 牧野和夫によれば同じ表白が「因州堂供養表白、通憲、康治二、八月二十日」と題して『醍醐寺承元四年』表白集(第一九九函No.一)に見えるという。この表白は成賢の弟子遍智院勝海の書写になる。牧野和夫「十二巻本『表白集』編集とその周辺」附、『大乘毘沙門功德経』と本地物・拾遺—『実践国文学』四五号 一九九四・一〇)参照。
- この堂の所在地は後白河院の蓮華王院のある法住寺境内の一部のようである。

- 『覚禪抄』によれば、信西はまた寛信から仁平二年(一一五二)鳥羽院のための祈禱の「巻数」の記録をも伝えられている(『覚禪抄』巻一三一、大正図像 巻五 p.六四三)。

- (45) 『法華堂正堂棟木銘』によれば当堂は久安四年(一一四八)、修理所行事大法師行祐のもとで修理の手が加えられた(『中世東大寺の組織と経営』p.四一三参照)。珍海と行祐の名は共に『東大寺碑文』巻六(No.二四五二 p.二〇五九—六三)に見える。

- (46) 信西と頼長は鳥羽院に随行して四天王寺には四度参詣している。
- 1) 久安二年(一一四六)九月十三—十八日(台記 巻一 p.一八四—六、天王寺旧記 続群書類従 巻二七・二 p.三三四)
- 2) 久安三年(一一四七)九月十二—十六日(台記 巻一 p.二二九—三〇、天王寺旧記 続群書類従 巻二七・二 p.三三五)

3) 久安四年(一一四八)九月十一日(台記 卷一 p.二六三—
六五、天王寺旧記 続群書類従 卷二七 p.三三六)

4) 仁平二年(一一五二)九月十一日(平範記 卷一 p.一五〇)

仁平度の際、信西の嫡男俊憲が同行している。高陽院・美福門院もまた同行。柳沢孝氏は「扇面法華経」はこの時に制作されたとする。留意すべきは表紙に羅刹女が描かれていることである。柳沢孝「扇面法華経冊子の成立をめぐる諸問題」(『扇面法華経の研究』)参照。

(47) この参詣でふたつのことに留意しておきたい。まず、頼長「聖徳(太子)伝 上」、大江匡房「続往生伝」を四天王寺滞在中に読んでいること。次に、太子伝を差し出したのが権別当前律師行祐(一〇九四—一六一 白河院息、別当権僧正行慶と縁戚関係あり)であることである。東大寺と四天王寺に同名の僧行祐が存在したことは単なる偶然であつたようだ。

(48) 永井義憲氏は「珍海の日本感通伝—散逸説話集研究の内」(『説話文学研究』一〇一九六八・三、『日本仏教文学研究』第三集に再録)で当説話集を紹介している。通憲(信西)を指すと思われる「感通伝」の一文は「聖徳太子平氏伝雜勸文」(十四世紀の法空撰。法空は弓達房あるいは了達房とも。彼は聖徳太子研究に熱心であつた大和橘寺の学僧。)彼の『上宮太子拾遺記』には澄憲の説草(大日本佛教全書、巻一一二 p.四三二)に言及している。その弟子聖云は『太鏡抄』、『太鏡底谷抄』、『太鏡百練抄』(当本には貞慶が出てくる)を編纂している。牧野和夫によると身延文庫蔵『聖徳太子平氏伝雜勸文』には「通憲」の名が付せられているという(同氏「中世説話と学問」 p.三五六)。

(49) この話は『報物集』(前掲書 p.一八四)、『幸心鈔』(第三卷、大正新修大蔵経 卷七八 p.七三六)

(50) 珍海筆愛染明王像を勝賢が後白河院に奉つたという話は『実婦鈔』に見え、それは建保四年(一一二六)二月四日のこととされる。深賢はこの話を成賢から聞いたと語っている。(大正新修大蔵経 卷七八 p.七〇六、また『遍口鈔』 p.六九八参照)。

空海の仁王経曼荼羅における南方尊像図が三宝院経蔵に収められていた事は、覚禪が寿永二年(一一八三)九月二十四日この曼荼羅の写しに色を付した際、「東寺本仁王経五方諸尊像」に次のように註記していることから分かる。「南方珍海筆、寿永二年九月廿四日、以三宝院御本、五方諸尊色付写了、覚禪」。

覚禪は明かに仁王経法に関する口伝を座主実海から受けている。実海は座主として短期間ではあつたが(一一七九—一一八二・一〇)当寺の運営に携わつた。これは勝賢の第二、第三次の座主在任期間にあたる。(寿永元年六月十五日—一一八二、大蔵経図像編 卷四 p.二七七/六六三参照)。

(51) 『三宝院経蔵目録』(二) (醍醐寺文化財研究所研究紀要 二二号 二〇〇六 p.一〇〇)。珍海作品の他に当目録には本研究にとつて興味深いものが掲載されている。表白集、肖像画を含む一連の絵画、聖俗とりまぜた書跡(空海、道風、佐理、行成など)、仏舍利、宝珠、十羅刹女関連や吉備真備筆と伝えられる聖教類、性空・弘法大師などの伝記類、多種多様な往生伝、往生要集、往生講式、さらにはいくつかあげてみただけでも玉造小町子形衰記、高野雑集、女院御発心地靈験記などという興味深い題名が載せられている。残念ながら目録に掲載されるこれら聖教類、仏画、世俗画がいつ寺院に入ったか確認することは非常に難しい。勝賢の奥書のひとつが蓮華王院経蔵の御書を書写したことにふれているが、目録に載る一連の文書には後世の奥書も存在している。大部分の作品は、勝賢の奥書や蔵司乘遍(？—一一八四 勝賢と親密な関係にあつたが、やがて暗殺される)の奥書(治承三年一一七九、元暦元年一一八四の勝賢の署名もある)から考えると、勝賢時代に整理されたもののものである。

(52) 『明義進行集』によれば敏覚は彼の「堂舎坊宇」すべてを明遍に付属している(p.五)。彼はすでに大僧都の地位を退き、賞讃したため、明遍は承安四年(一一七四)八月九日に権律師となつたのであろう(『吉記』)。明遍はまた珍海の「一乗義私記」を書写している(大正新修大蔵経 卷七〇 p.六四九)。

(53) この検分については通憲の『本朝世紀』康治元年(一一四二)五月六日条参照(卷二十四 p.三七二)。彼の任務が明確に語られている。

(54) 鎌倉時代初期の『古事談』、『沙石集』、『平治物語』の後世の異本には『本朝世紀』康治元年九月十四日条(p.三九一一二)に語られる検分が反映しているようである。

(55) 初撰本『古来風体抄』上(『日本思想大系』 p.二七二)

(56) 翻刻は櫛田良洪氏「統真言密教成立過程の研究」参照。当本の状態は良好ではなく、広げると破損するおそれがあるという。「平安・鎌倉仏教要文集」(中)で翻刻された時にはすでに判読不明の箇所があつた

(p.二五七)。

(57) 高橋秀栄氏「平安・鎌倉仏教要文集」(下) p.二六八に見える。私見では「法眼御房」を通憲の言葉の目的語として解釈し、「云」の主語としてとらえない。つまり、「通憲入道法眼御房に語りて云わく」と解釈する。

(58) 当文も「平安・鎌倉仏教要文集」(下) p.二八〇に翻刻されている。興味深いことにこの会話が交わされた頃、珍海は『決定往生集』を撰述中であった。これは保延五年(一一三九)三月二十一日病の最中述作開始、康治元年(一一四二)六月十二日完成した(『東大寺のすべて』参照)。ところで、決定往生の真言そのものは、珍海の『決定往生集』にみえない。ただ、『太元』で決定往生真言の出典とされる『般若三昧経』は、珍海の『決定往生集』にも引用されている。出典の問題は、心覚の『鵝珠鈔』(真言宗全書 第三六卷 p.五)にもみえる。心覚は、「小野僧正真言集」が『般若三昧経』は決定往生真言の出典であると述べているにもかかわらず、『般若三昧経』に真言は一つもないと結論している。永巖(一〇七五—一一五一)の『要尊法』でも、この真言の出典が問題にされている。

なお、引用文中にある「馬」字は、この真言は馬頭真言であることを示唆している。

(59) 当文を初めて翻刻したのは田中教忠氏『蓮華王院三十三間堂考』(巻中一九三二)のようである。この文の意義については竹居明男氏の論評が「寺院の宝蔵(経蔵)と院政期の文化」(『日本古代仏教の文化史』)にある。また『国立歴史民俗博物館研究報告』第七二集に当史料が紹介されている(一九九七・三 p.九四)。池田亀鑑氏によれば信西が空海書を蓮華王院に渡すべしとの院宣を受けたことは『野澤流諸派略記』に見えるという(『古典の批判的処置に関する研究 第一部』—土佐日記原典の批判的研究—一九四一 p.二九)。

(60) この話を聞いた時、成宝は律師であったと言われている。建久二年(一一九一)十二月十六日勝賢から准頂を受けた時、彼はまだ律師であったから(勸修寺別当でもあったとしても)勝賢がこの話の源であったと思われる。

(61) 『覚禅鈔』巻二一九(大正新修大藏經 圖像編 巻五 p.六一三)

(62) 『石清水文書』巻四 No.一四六二(一九二二) p.三一八。信西真筆と確認できる書は現存しないため、この判断の根拠を測ることは困難であ

る。

(63) 田中幸江氏は『藤原通憲資料集』の小文で、信西がいかにかに広範囲にわたって古典を利用していたかを指摘している(p.二七三—二七五)。また豊田裕章氏「石清水八幡宮所蔵『異朝明堂指図記』と阮謙『周室王城宗廟明堂図』について」(皇學館大學史料編纂所報『史料』二〇八号 二〇〇七)参照。

(64) 偶然の一致とは言え無視するには惜しい出来事がある。仁和寺円堂院で宝物目録点検に居合わせ、信西の実検した品物を拝見したことを記録した人がいる。それは信西の娘婿である藤原長方(一一三九—一一九一)と藤原隆季(一一二七—一一八五)であった(『禪中記』)。この訪問は後白河院五十賀の準備のためであった。信西の娘たち、その夫である長方、隆季がここに選ばれていることには何らかの関係があるであろう。蘭田香融「婆羅門僧正(菩提遷那)の剣—仁和寺円堂院旧蔵「杖剣」相伝の由来」(『日本古代社会の史的展開』一九九一)参照。神田邦彦氏の要約参照(『藤原通憲資料集』p.二二—二二二)。

(65) 『古記』承安三年(一一七四)三月十三日条、同八月十六日条参照(巻一 p.四八、五六)。斎木一馬氏「古記録」。田島公「中世天皇家の文庫・宝蔵の変遷—蔵書目録の紹介と収蔵品の行方—」(p.四八)

(66) 『興福寺別当次第』(『大日本仏教全書』巻一 p.二五)

(67) 『東大寺図書館蔵「讚仏乗抄」』巻八 第二十八(藤田経世『校刊美術史料』寺院遍 下巻 p.九九)

(68) 『注進法相章疏』(『大日本仏教全書』巻二)。以下にあげる十一件のうち*印を付したものが『注進法相章疏』に見られる。

- * 1、『百法論疏』、一卷、大垂光撰
- * 2、『種姓差別集』、一部三卷、新羅神昉撰、此中巻古書也
- * 3、『法花義決解節記』、一部四卷、護命撰
- * 4、『心経幽贊解節記』、一部四卷、同師撰
- 5、『三論大義抄』、一部四卷、西大寺玄叡集
- * 6、『普賢経玄贊』、一部三卷、専守守朝集
- 7、『通破四教章』、一卷、東大寺徳一撰
- 8、『仏智浄論』、一卷
- * 9、『最勝遊心決』、善珠
- * 10、『唯識肝心』、各一卷、本所闕補之(善珠)
- * 11、『法華玄贊要集』、一部三十五卷。

(70) 杏雨書屋(財団法人 武田科学振興財団)の『春秋経伝集解 紙背表白』には五卷本『表白集』の巻二から最終巻までを収めているが、真福寺大須文庫の『密宗表白』で補うとその全貌が明らかとなる。『勝賢表白集』の一部は『表白集』の名で『続群書類従』巻二十八上 釈家部百十に所収。

(71) 勝賢作品を含む『相覚記』は『大日本仏教全書』第一卷(諸宗章疏録巻三) p.一七五―一六に出る。相覚の生没年は『常楽記』によれば一三五―一三九二(『群書類従』巻二十九 p.二二七)。彼は地蔵院僧正道快(二三六八―九八の生存が確認できる)と兄弟で、地蔵院前大僧正の名で知られる覚雄(?―一三六九)の甥である。

(72) 『醍醐寺地蔵院経蔵目録』は建治元年八月十四日の年紀を持つが、これは『田中穰氏旧蔵典籍文書』に見える。

(73) 勝賢、成賢の校点奥書の写真は柳沢孝氏「高雄曼荼羅の研究」(『美術研究報告 高雄曼荼羅』一九六七、p.九八)を参照。この曼荼羅が守護寺、仁和寺、蓮華王院の間で転写されたという事実から、信西の息たちの関与があった可能性がうかがえる。

(74) 反町茂雄編『スペンサーコレクション蔵 日本絵入本及絵本目録』p.三

(75) 勝賢の奥書から分かるのは彼が心覚の校合本を書写したことである。そうすると厳密に考えると『香葉抄』は勝賢の本なのか、心覚の本なのかということになる。その弁別の難しさは、以下の『幸心鈔』の記述にもみえる。ここでは覚洞院(勝賢)が「被書一卷香葉抄」れ、当本も他の本も「要書」であると述べながら、「件物常喜院抄歟」と記している。つまり「又香葉沙汰喜皮子内被書小卷物。覚洞院於高野集数本被書一卷香葉抄。是等可為要書。件物常喜院抄歟」(『大正新修大蔵経』巻七八、p.七三四)

(76) 川瀬一馬「古辞書の研究」参照。川瀬氏はまた「香葉抄」の近世写本の一本に勝賢、成賢の奥書に続けて、深賢の奥書があることを指摘している(同書 p.二五三)。

(77) 通憲が香の知識を華蔵院の宮聖恵法親王に授けたという話は『実帰鈔』(『大正新修大蔵経』巻七八、p.七六)や『土巨鈔』にも出ている。どうやら小野流におけるこの話の流通は勝賢が源であったらしい。

(78) 沼本克明『香葉字抄』(汲古書院 一九八一、p.三二〇)

(79) 『貫首秘抄』群書類従、公事部巻第一〇四、一九〇五、第五巻 p.九六七

(80) 京都国立博物館編「藤原道長…極めた栄華・願った浄土:金峯山埋経一千年記念特別展覧会」(二〇〇七) p.三三六。

(81) 三木雅博「倭漢朗詠集とその享受」(勉誠社一九九五) p.三七四

(82) 小松茂美氏は『水言鈔』写本の表紙に書かれている「勅息勝賢之」を「勅勉なる息子勝賢の」と解し、通憲/信西を意識していたと見ている。さらに氏はこの写本が実兼の手から通憲、勝賢に渡り、最終的に成賢に渡ったものと考えられている(『日本絵巻大成』三の「吉備大臣入唐絵巻」p.一二六)。氏の仮説はしかしながら、勅息は沙門の同意義で勝賢が父の死後、自身の名を勝憲から勝賢に変えたとされる通説と矛盾している。あるいは勝賢が父を偲んで書き付けたもの、または絵をよくしたと考えられている母を敬うために書かれたものと考ええることも可能である。この問題は本研究の後半で論じるつもりである。

(83) このエピソードは牧野和夫「親快記」という窓から―中世初期の説経資料に関する一、二の問題―(『中世文学』三二号(一九八七))に紹介されている。勝賢には宰相入道といわれるふたりの兄弟がおり、ひとりとは修範、もうひとりとは俊憲である。私見ではここでいわれているのは前者のことだと思われる。とはいえ彼の没年は不詳である。

(84) 現在出版されている興然の主要著作には『四巻』(『大正新修大蔵経』巻七十八、『五十巻抄』(『真言宗全書』二九―三二)、画像関連では『金剛界七集』(『大正新修大蔵経』画像)巻一、p.三四九―四二四)、『曼荼羅集』(『大正新修大蔵経』画像)巻四 p.二六三―二七八)、『画像集』(『大正新修大蔵経』画像)巻四 p.三〇三―三六四)がある。

(85) 『治承記』(『大正新修大蔵経』画像)巻四、p.四一四―四二二)

(86) 興然が勝賢の弟子であったことを明確に示すのは、『金沢文庫古文書』十一、識語編二。これは柴田賢龍氏の御示教による。この文言は東京大学史料編纂所の森田清太郎氏所蔵文書中、題名不詳の文書にも見える。

(87) 覚禪、勝賢の関係を追った上川通夫氏は、師弟がたまたま少納言の父とその息子であった事例をあげている。「序論…『覚禪鈔』研究についての基本視角」(『覚禪鈔の研究』二〇〇四、p.一四)

(88) 安元二年六月二十三日に行われたこの法会は地蔵院道快僧正の『五大虚空蔵法記』(永和二年七月五日の年記あり、『三宝院文書』巻三十三、p.八九―九五)に記録がある。興然、覚禪両者の参列は、武内孝善氏が「理明房興然伝攷―理明房興然伝記編年資料集」(『高野山大学論

叢一八号、一九八三・二)において「勸随通用、小折紙、秘法、上」を引いて明らかにしている(同論文 p.一六八)。

- (89) 寺院のコレクションとそれを収蔵する堂舎の建立に加え、朗澄は自らのコレクションのための移動図書館ともいえる文車の整備を行っている。寺院の聖教類を守らんとする彼の願いは、異形の一团とともに悪魔となったという話が、十四世紀始め「石山寺縁起絵」の制作期までに出来上がって絵画化されている。田中稔「石山寺校倉聖教について」(『石山寺の研究―校倉聖教・古文書篇』法蔵館一九八一 p.六三九) 参照。

- (90) 『続伝燈広録』巻八(『続真言宗全書』第三十三卷 p.四一二)

- (91) 真海の説は深賢の『実帰鈔』に見える(『大正新修大蔵経』第二十八巻 p.七一四)。またこれは赤松俊秀氏「上醍醐の清瀧明神像について」(『鎌倉仏教の研究』続、平楽寺書店 一九六五。p.四五四―五)に引用されている。

- (92) 牧野和夫「常謹撰『地藏菩薩心験記』和訳絵詞、その他―新出本紹介を兼ねて―」(『実践女子大文学部紀要』第三三集 一九九〇)によれば、義演は下記の奥書を書写し、作品を深賢のものとしている。

地藏菩薩心験記奥書云、嘉禎二年卯月九日、於醍醐寺地藏院、書写了。予自十八昔、至六句今、仰此尊之悲願、憑惡趣之濟度。仍造像、奉安住。仍号地藏院而已。常念地藏沙門深賢記之。演云、右以深賢法印自筆本、書写了。(『醍醐寺新要録』 p.七三〇)

- (93) この歌は時に五九一番ともされている。『新編国歌大観』勅撰集篇、第一巻 (p.一九八) 参照。

寺本直彦氏は『源氏物語受容史論考 続編』(一九八四、p.七一九)で、この歌に『源氏物語』葵の巻における光源氏の葵上への悲嘆を歌った次の歌の影響を受けていると指摘している。

かきりあれは うすすみころも あさけれと
なみたそそでを ふちとなしける

- (94) 『月詣和歌集』第九八〇番。杉山重行「月詣和歌集の校本とその基礎的研究」(新典社一九八七、p.二七四) 参照。

- (95) 『新編国歌大観』(第一巻 p.四六七) 雑、巻三、第二二六三あるいは二二七一―二七二番。

- (96) 角田文衛『王朝の明暗』(東京堂出版 一九七七、p.五二―一四)
(97) 築島裕「醍醐寺蔵本『傳法灌頂師資相承血脈』」(『醍醐寺文化研究所研

究紀要』第一号一九七八、p.三三―一三五 (p.五九)

- (98) 『続伝燈廣録』第八巻、『続真言宗全書』第三十三巻、p.一六四

- (99) 現存する『讀仏乘鈔』断簡(金沢文庫)は『安居院唱導集』に公刊されているが、その内容は明らかに興福寺に関係する人物の視点で書かれており、天台僧によるものと考えられない。または、『讀仏乘鈔』の東大寺図書館本には明白に解脫房貞慶作のものがみえる。

- (100) 中野玄三「峯定寺諸像の系譜―長寛元年造立仁王像の銘文を中心に―」(『国華』九二六号、一九六七)、『日本佛教美術史研究』(思文閣出版、一九八四)

- (101) 例えば近本謙介「春日権現験記絵」と貞慶―『春日権現験記絵』所収貞慶話の注釈的考察―(神戸説話研究会編『春日権現験記絵 注解』和泉書院、二〇〇五)

- (102) 阿部泰郎「宝珠と王権」(『岩波講座 東洋思想』第十六巻 日本思想、一九八九)

- (103) 『二間観音記』一一二函一八号(『醍醐寺文書聖教目録』第六巻、二〇〇三、p.三三八)

- (104) 『義准准后日記』(弥永貞三、鈴木茂男校訂『史料纂集』古記録篇 第三巻、p.二六)

- (105) 『雑鈔』/『別尊法可習事』に加え、これらの奥書は『教鈔』(第一二八・五)、『各経秘法』(一一二〇・二一・一、一一二〇・二二・二)にも見いだすことができる。後者は生西の『松橋厚造紙』原本の主要部分に相当するように思える。著者がこれらの巻に目を向け、内容を確認できたのは金沢文庫の高橋秀英氏の仕事のおかげである。氏は「笠置上人貞慶に関する新出資料四種」(『金沢文庫研究』二八六号、一九九一・三)で金沢文庫の資料に弁入道生西(貞憲)にふれるものがあることを最初に指摘した。氏はまた「平安・鎌倉仏教要文集(下)」(『駒澤大学仏教学部研究紀要』第五二号、一九九四・三)で生西に関連する多くの奥書を公刊している。また密教事相の研究者でもあり醍醐寺流の阿闍梨である柴田賢龍氏からのご指摘のおかげでもある。

『雑鈔』/『別尊法可習事』は比較的広範囲に流通したようである。鎌倉期の写本が石山寺校倉文庫に、江戸期の写本が京都大学図書館に所蔵されている。

- (106) 題名「胎印抄二巻」に続けて「依弁入道詔注文」の註記がある。目録を前後に分けて以下に記すやや不明瞭な註記がある。註記の最初の部

分は以下の通りである。

「已上私抄集也、依乘蓮房（弁入道貞憲也）仰難背、乍憚目錄之、安元元年九月十一日」

しかしこの註記はさらに続けて「隆遍法印作此目錄」と記している。合わせてひとつの註記として読むならば生西と隆遍が共にこの目錄編集に携わったように見える。しかし、これを別々の註記として読むと、生西が目錄前半部分を心覚から安元元年（一一七五）に得て、隆遍がこれを補足したものととれる。しかも、隆遍が法印位に登る時期は、彼の晩年であるから、ずっと後のことになる。無論、この「法印」は後の書写者による隆遍に対する単なる敬称と考えることもできる。山崎誠氏はほとんど同じ生西の注釈を含む二本の目錄写本を紹介している。一本は真福寺で発見された『常喜院作集目錄』〔元応二年（一一三二〇）の頼心（一一八一—一一三三六）書写本〕、もう一本は「常喜院作集目錄」解題（『真福寺古目錄集』二、p.六三四—六八）に見える金剛三昧院の『常喜院作目錄』〔寛元二年十月二十七日（一一三〇三）法印権大僧都猷然書写本〕である。

同様の註記が『先徳制作目錄』中の『三家撰集目錄』にある「心覚阿闍梨制作」の部分に見いだせる。（川瀬一馬監修『龍門文庫善本叢刊』第十二巻、一九八八、p.三五六—六一参照）

(107) 心覚の主要な圖像集成である『別尊雜記』は彼の没後数十年を経てから名づけられたと考えられてきた。ただし阿部泰郎氏の指摘によれば『別尊雜記』は、心覚の作品集成である『心抄』の一部をなす可能性があるとということである。『心抄』は守覚法親王の編で仁和寺蔵。（『真福寺古目錄集』の『文車第二目錄』解題参照）

(108) 著者はこれまで『諸秘密記』（早期の異本。叡山文庫蔵）を含む五本の書写本を検討してきた。しかし、次に紹介する物語はこれら全ての写本に見えない。天台寺院に出回った写本から抹消されてしまったようである。この翻刻は国文学研究資料館から提供された琴堂文庫蔵写本のマイクロフィルム（No. 二・六・八六三）から作成した複写写真に基づいている。

(109) 深賢は信貴山に住してたことが知られており、彼はそこで『白氏新樂府略意』を書写した。ここでいう「私」とはおそらく親快のことであり、「師主」とは深賢のことであろう。

(110) 「弁入道生西」という名は、明らかに春秋の二季彼岸梵網供養で読み上

げられた交名に見える。「内山之記」（内山永久寺の歴史と美術）資料編 p.四六）によれば、交名の名がはじめて用いられたのは嘉祿二年（一二二六）八月二十七日。

生西と永久寺の重要絵画、彫刻作品との結びつきをはっきりさせてみたいと思うが、いまだにそれは叶わない。しかしひとつの興味深い事実がこの結びつきを示すヒントになるように思える。亮恵の御影を描いたといわれるのは僧正光賢（一一〇四—一二五〇以降）である。（内山永久寺縁起、前掲書 p.七二）。この光賢は憲深の弟子である。しかし彼のもともとの師、安芸律師もまた孝賢といい、成賢の弟子であった。成賢の弟子孝賢が大切な師の肖像を描いたのである。（続門葉和歌集）七四九、七五〇の詞書参照）そしてすでに述べたように生西の『松橋厚造紙』を成賢にもたらししたのは孝賢なのである。

(111) この最後の「弁入道」は菩提山寺の誤りである。「菩提」の異体字が「弁」に似ていることから生じたもの。同様の誤りが『山家撰集目錄』にも見える。ここでは「弁入道」が「菩提」入道」になっている。書写した顕良は、『傳法灌頂師資相承血脈』（研究紀要）第一号、一九七八、p.五四）によれば後に醍醐寺憲深の弟子となっている。禅順房は信源の房名。彼は亮恵自身の弟子慈源のただひとりの弟子である（前掲書 p.七〇）。禅堂房はしたがって禅台房の誤りである可能性がある。

(112) この奥書の解釈に確信があるわけではないが、「一蓮房」とは単に生西の乗蓮房の間違いかもしれない。しかしこの一蓮房という名はもうひとつの興味深い名につながってゆく。一蓮は一蓮上人真尊のことかもしれないのである。彼のことは、牧野和夫氏が寂仙上人遍融と『七天狗絵詞』の関係を論述する中で言及されている。牧野氏はこの広い視野に立った論文で、奈良の白毫寺、理性院・金剛院流の醍醐寺僧たち、室生寺の舍利信仰、『平家物語』の生成との関係を論じている。同氏「新出東寺蔵（七天狗絵詞抜書（外題「延暦園城東寺三箇寺由来」）一卷をめぐる二、三の問題」（『実践国文学』第六九号）

(113) 高野山大学図書館のオンラインカタログによれば少なくとも二本の『別尊雜記』初期写本が同図書館に寄託されている。これらがこの問題を解く鍵になるかもしれない。しかし管見のおよぶかぎりこれらは公刊されてはいない。

(114) 当写本は頼憲によって文永七年（一二二六〇）に書写されている。『奈良

国立文化財研究所年報』一九六三、p.二〇参照。またニューヨーク・パブリック・ライブラリーのスペンサー・コレクションには同じ唐招提寺のセットから出た『別尊雜記』の一卷が蔵されている。

- (115) 西崎亨「大和でみた『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』古点二種」(『訓点資料の基礎的研究』p.一五—一八)参照。弁阿闍梨と大和といえば、無住一円房道暁(一二二六—一三二三)の『沙石集』には弁阿闍梨が釜口別所「長岳寺」に立ち寄った話を載せている。これは一海の弟子信恵と関係ある寺で、信恵は彼の弟子である叡尊に主導された真言律の動向の中で重要な働きをする人物である。

- (116) 生西が心覚や『別尊雜記』と関わっていた可能性、一海から受けた陰陽道風の占星術についての知識(これは『各経秘法』に詳述されている)、彼の一門が関わったかなりの数にのぼる絵画制作プロジェクト、彼の甥である範賢が石山寺においてもついていた聖教コレクションの監督ぶりを考慮すれば、こうした関連付けが必ずしも見当違いだと言いきれないだろう。

無論、「弁阿闍梨」と呼ばれた僧は同時代に少なからず存在した。事実、生西とともに心覚作品の目録作成に関わったと思える隆遍もまたそう呼ばれていた(同じ石山寺の聖教コレクションの別の奥書に見える)。また彼の『久能寺経』の奥書では若き心覚が弁阿闍梨と記されていることを想起されたい。

- (117) 『血脈類從記』第七卷、p.一六六、『真言付法本朝血脈』(『続真言宗全書』第二十五卷、p.一六)

- (118) 貞玄の記録は『法勝寺御八講問答記』、『最勝講問答記』に出る。(平岡定海編『東大寺宗性上人の研究並史料』第1巻)

- (119) 永村真「論議と聖教―『恵日古光鈔』を素材として―」(速見侑編『院政期仏教の研究』一九九八、p.三三六)。永村真『中世寺院史料論』に再録。

- (120) 中野玄三氏は「貞玄はほとんどすべての『覚禪鈔』の尊法を書写したと考えてよい」と結論づけている。同氏「『覚禪鈔』の伝播と『勸修寺本』の成立」(『覚禪鈔の研究』p.三七)

- (121) 上川通夫氏は大須文庫の『如法尊勝法』写本が覚禪自筆本かどうかという問題を徹底的に突き詰めているが、確認するには至っていない。同氏「『覚禪鈔』如法尊勝法 解題」(『真福寺善本叢刊』第三卷、臨川書店 二〇〇六)。その後、中野玄三氏が「本文の筆者が覚禪であるこ

とが明らかにされている」と断定したことがある。(『資料紹介』真福寺本『覚禪鈔』「如法尊勝法」『佛教藝術』二九七号(二〇〇八・三))

- (122) 『覚禪鈔』図像集成Ⅳ(『仏教美術研究所上野記念財団助成研究会研究報告書』一九九六、p.四六)

(Michael Jamentz / 京都大学文学研究科講師)
(よねくら みちお / 上智大学国際教養学部教授)

【付記①】

本稿は、平成十九年九月に開催された第三十六回夏季講座「院政期の絵画」(主催/奈良国立博物館・奈良女子大学二世紀COEプログラム、会場/奈良女子大学講堂)での口頭発表を成稿したものです。拙い口頭発表が、このような形で公開されるにあたっては、奈良国立博物館の学芸員の方々に応援をいただきました。そして、本文について種々なご教授をいただいた名古屋大学の阿部泰郎さんと、煩雑な原文を日本語に訳して下さった上智大学の米倉迪夫さんには、とりわけ感謝の意を表明させていただきます。

【付記②】

この論文は、前記の口頭報告時に六章立てだったもののうち、第四章までを文章化したものである。諸事情により第五章以降を掲載することはできなかったが、以下に要旨を記すことで御寛恕を願いたい。

第5章では、まず所謂『目無経』制作とその受容について、現存する『源氏物語絵巻』制作に関与したという議論もある、信西妻で勝憲母の紀伊二位が最も可能性のある制作者候補であることを指摘したうえで、信西一門と絵巻制作の監督について述べ、信西が政治的アレゴリーとして『玄宗皇帝絵巻』を制作したことや、息子静賢が『後三年合戦絵巻』を画かせたことと同様に、信西の嫡男である俊憲(真寂)が宮廷の儀礼を画いた絵巻制作に同じ役割を果たしたことを示す。政治的利用や宮廷儀礼復興運動を考えると、当代絵巻の優品の中には信西一門との関わりを再検討しうるものがあり、特に『年中行事絵巻』や『吉備入唐絵巻』はその可能性を秘めているだろう。絵巻制作とは直接関わらないものの、俊憲は当代絵巻の中で最も入念に作り込まれた作品である『平家納経』の制作に関与しており、実は彼こそが当企画の願文作者なのである。最後に、信西の息子澄憲が花林苑の歌人達のために

法会において説法を行っていることに着目した。この歌人達の歌にはしばしば源氏物語や法華経に基づいた歌が詠みこまれていた。こうした企画は源氏物語の受容や和歌の鑑賞を聖なる行為としても位置づけたという意味で期を画するものであったと考えられている。澄憲が物語や和歌の作者とその文芸作品を弁護しつつ説法するなかで、源氏物語や柿本人麿、そして普賢菩薩の画像が供養されていたことを考慮する。

第6章では、深賢が描いた醍醐寺の守護神清滝権現像の検討から始める。これは深賢が成賢から伝法灌頂を受ける少し前の作品と考えられる。深賢は『平家物語』という用語をはじめで使用した人物であり、『平家物語』をその生成早期の段階で書写したようである。彼は禅覚と兄弟であるらしく、禅覚の『三僧記類聚』によって信西と恵什の出会いや、紀伊二位が勝賢の母であったことを知ることができるのである。ところで、清滝権現像の図中に描かれた若い女性は、鎌倉中期の『御子守明神図』にも見出だせるのだが、そこに描かれる御子守明神の姿かたちは奈良国立博物館蔵の重文普賢菩薩十羅刹女図の一人にほとんど一致する。このことはこの三画像が共通のモデルを持っていることを示唆している。そして注目すべきことに、奈良国立博物館本とほとんど同一構図の普賢菩薩十羅刹女図が存在する。それは須磨寺の名で知られる福祥寺の蔵本である。同一構図の普賢菩薩十羅刹女図が二本存在することは、東大寺大仏縁起の場合のように数多く書写がなされた事や、安居院流の絵師が一二四〇年代に行った勝尾寺の勧進活動の縁起絵巻類を制作した事実を考えれば、極めて示唆に富んだ事例といえる。この時期はちょうど『平家物語』の基本的なかたちが出来上がった時期と重なる。そしてこの場所は、安居院流の活動や影響力が強かった地域からそれほど離れてはいない。清澄寺や有馬温泉寺の勧進活動に用いられた『冥土蘇生記』は、この地域に由縁がある。この話は『平家物語』にとりこまれているが、その内容は天台の説教僧慈心房尊恵の閻魔王庁への参詣と蘇生譚である。尊恵の閻魔王庁への描写が、実は普賢十羅刹女の図像に符合するのである。普賢十羅刹女図では通常普賢・十羅刹女に二天、二菩薩を加えるが、尊恵の話でも二天、二菩薩、十羅刹女が描写されている。ただし普賢菩薩は現われない。しかし、尊恵の参詣場面を普賢十羅刹女の図像に照らして見るならば、尊恵こそが普賢菩薩の役割を果たしていることに気づく。尊恵（普賢）の蘇生への途を想い描いてみるならば、まさにこの図像そのものとなるであろう。このことは当図が追善供養に用いられた理由を解く鍵となろう。

この図像が用いられたもうひとつの場所がある。それは法華山寺の法華三昧堂で、これは慶政上人の寺であり、また貞女の書写になる松橋本『覚禅抄』を成賢の弟子頼賢が書写した場所でもあった。この場所こそが今回のいくつかの論点、すなわち真言密教図像と天台系普賢十羅刹女の図像をまとめた寺院なのである。